

古 考

逗子市小坪・新宿

赤 星 直 忠

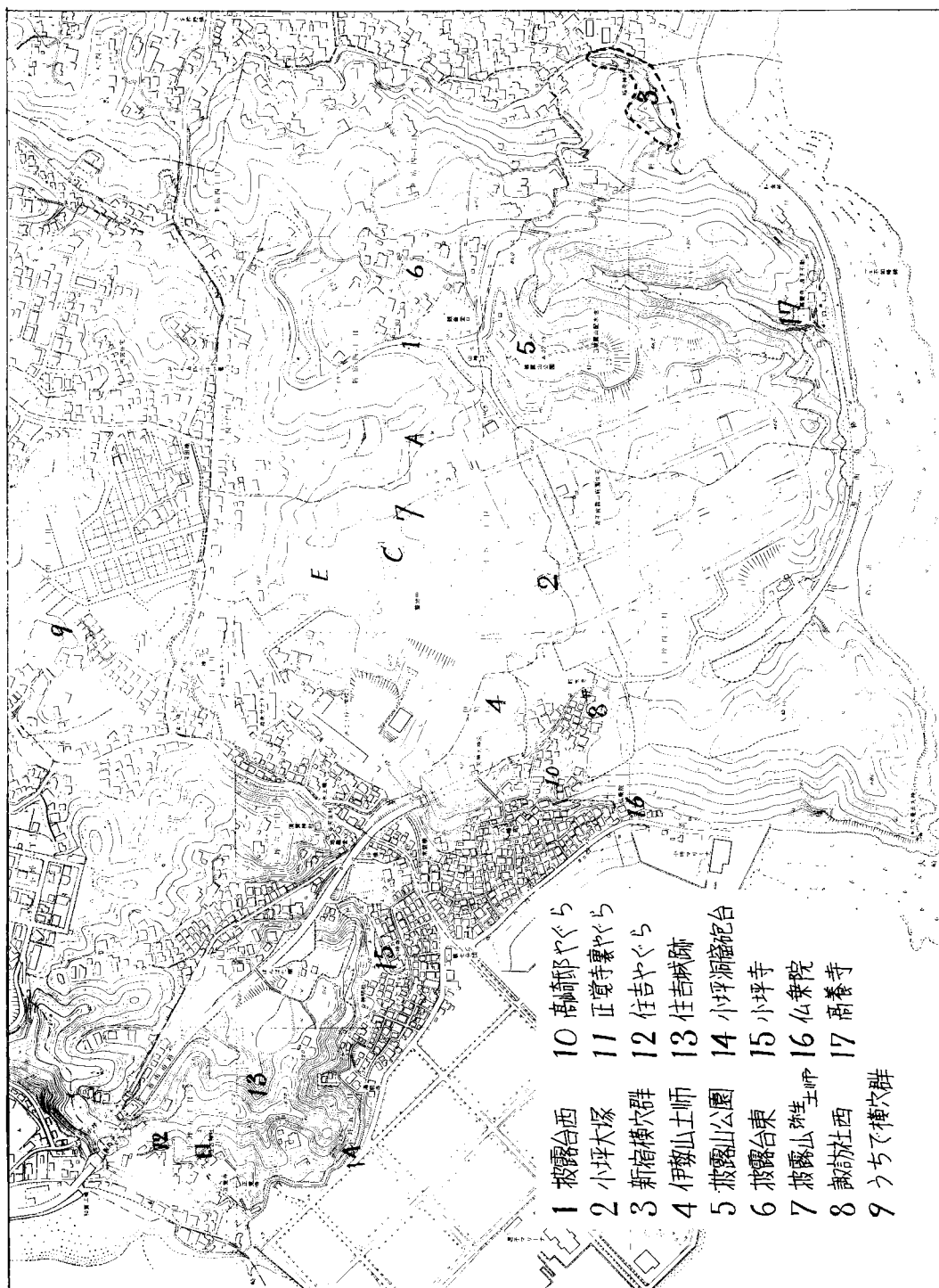
披露山遺跡概観	74
披露山公園内遺跡	76
披露台遺跡	77
披露山A地点遺跡	80
披露山C・E地点遺跡	83
披露山D地点遺跡	90
諏訪神社西遺跡	91
大崎土師遺跡	91
新宿横穴群	92
うちで横穴群	96
新宿海岸横穴	98
小坪の大塚	99
字森の上出土和鏡	101
まんだらどうやぐら群	102
小坪高崎邸やぐら	114
正覚寺裏やぐら群	114
住吉やぐら群	114
新宿の富士塚	116
住吉城跡	120
小坪臨時台場	126
小坪洞窟砲台跡	129
小坪高角砲台跡	132
狙撃陣地跡	132
高養寺五輪塔	133
小坪小学校前バス道の塔	134

仏乗院境内の塔	134
正覚寺境内の塔	134
新宿 2 丁目の塔	135
うちで谷の塔	135
仏乗院の板碑	136
小坪寺の板碑	136
高崎邸の板碑	137
仏乗院の石灯籠	137
小坪寺半鐘	138
小坪地藏堂の石像	139
小坪の祭	140

披露山遺跡概観

逗子市の西が鎌倉市と境する部分には旧鎌倉の周辺を西・北・東ととりまく丘陵の中、鎌倉の北東太平山（標高150m）を頂点とし、南へ延々6kmのびて海に達する東側丘陵の南端部分がある。この丘陵南端部は鎌倉市材木座海岸の東端、飯島崎から逗子海岸の西端、俗に浪子不動の名でよばれる不動堂（高養寺）背後の丘陵にわたるもので、その間に小坪部落がある。小坪海岸の東南の崎を大崎という。大崎と浪子不動との間に小谷があり、その前方海岸を葛ヶ浜とよぶ。葛ヶ浜と浪子不動の背後にせまる丘陵の山上一帯を披露山とよぶ。逗子市新宿に属し、山頂に披露山公園があり、その北方につづく尾根に披露の部落がある。古道は小坪の「うばがやと」から小坪小学校前を北東にのぼって、披露部落に至り、七曲坂を通して逗子側に下ったと伝える。遺跡は主として披露山一帯の丘陵にあり、一部はこの西に連なる伊勢山にわたっている。戦前すでに披露山縄文遺跡（披露台西遺跡）・小坪大塚・大崎土師遺跡・新宿横穴群・伊勢山土師遺跡が知られていたが、戦後更に披露山公園遺跡・披露台東遺跡・披露山弥生～土師遺跡・諏訪社西遺跡が発見された。これらの中、披露台西遺跡は戦時中兵舎建造によって失われ、東遺跡は昨年逗子市教育委員会によって調査された。披露山公園内遺跡は戦時中高射砲陣地築造工事によって出現したが同時に消滅し、終戦直後の踏査によって明らかにされた。新宿横穴群は大正地震後発見され、昭和初年調査された。稲荷社わきのものは崩壊し、存在がわかる程度であり、旧岸別邸（現馬淵建設所有地）内のもは、その後きり崩され又は埋没して、現存が確められたものは左端の3穴のみである。小坪大塚・伊勢山上土師遺跡・披露山弥生～土師遺跡（A・C・D・E地点遺跡）はTBS団地工事によって消滅したが、A・C・E地点の調査のみがかりうじてできた。大崎土師遺跡は自動車専用道路工事で失われたか所在不明となった。諏訪社西遺跡のみが現存する。

地方市町村における祖先生活を記録したものは絶無といってよい。しかし幾千年も前から住民祖先の生活がつづいている以上、その地に生活の歴史がないはずはない。紙に書かれた歴史がないだけで、かれらが生活した場所には何らかの生活の証拠をその地下に埋没するという形で、留めているのである。我々は地下に記録された祖先の歴史を発掘調査という手段によってよみとることができる。破壊される土地は破壊される前にその地下に記録された歴史を発掘調査によって記録に留めなくてはならないのである。記録に留めることなく破壊することは自分で自分達祖先の生活記録を抹消することであって、その歴史は永遠にわからなくなるのである。祖先の歴史を自分の手で抹消した者の名は遺跡の名とともに記録せられ永久に消えることはない。



- | | |
|-----------|------------|
| 1 披露台西 | 10 高崎邸やぐら |
| 2 小坪大塚 | 11 正覚寺裏やぐら |
| 3 新宿模穴群 | 12 住吉やぐら |
| 4 伊勢山土師 | 13 住吉城跡 |
| 5 披露山公園 | 14 小坪洞窟紀台 |
| 6 披露台東 | 15 小坪寺 |
| 7 披露山跡生土師 | 16 仏衆院 |
| 8 誠信社西 | 17 高養寺 |
| 9 うちで模穴群 | |

披露山公園内遺跡

所 在

逗子市新宿5丁目、披露山公園。披露山の最高部標高90m（三角点は92.7m）。現在公園として展望台や猿が島がある地。戦時中は披露山防空砲台の所在地だった。

出 土 品

戦時中防空砲台建設工事によって山頂が削平された部分であり

- (1) 戦後縄文早期に属する撚糸文土器片が採集されたことがある。
- (2) 防空砲台跡付近で扁平礫の一端を打欠いて刃部とした所謂礫斧と、扁平な楕円形自然石の側面及び表裏面中央に打滅痕のある硬質砂岩製敲石が採集された。逗子市川間住小池威人氏所蔵。

ま と め

披露山の最高部である公園所在地には縄文早期の遺跡があったことが明らかであるが、その編年位置は不明である。

披 露 台 遺 跡

概 要

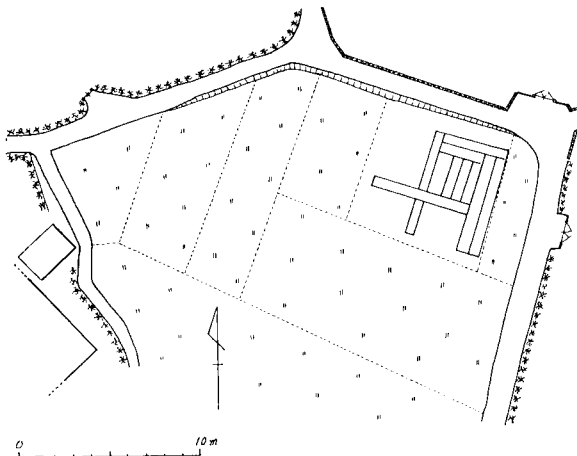
披露山公園の北側の台状丘陵部を土地では披露台とよび、民家群がある。新宿4丁目・バス停「披露山入口」から公園に向って山腹をのぼりつめるところから民家がある。この辺から公園北裾の地藏堂北側付近までの畑地に縄文土器片及び石器の散布が知られ、同所高橋茂氏（昭和38年亡）が採集していた。（昭和24年5月実見。蛇紋岩製定角式磨石斧1、石質不詳定角式磨石斧半欠1、硬砂岩製石杵断欠1。）この散布地から東方高橋馨氏までの間には土器片の散布がなく、別に同宅前（南）畑にわずかの土器片散布地がある。前者を披露台西遺跡、後者を披露台東遺跡とよぶ。昭和47年4月1日から3日まで3日間逗子市教育委員会によって調査されたものは主として東遺跡である。

西 遺 跡

戦時中、道の西側畑はきりとられ削平された。地藏堂に近い部分の道の東側畑も削平され、ともに軍兵舎建設地となったため、遺跡は全く壊滅した。戦後は道の東側畑でわずかの土器片が採集されたほか、民家周辺でもわずかの土器片が採集されたことはあるが、細片のみである。これら範囲で採集された土器片（高橋茂氏所蔵品も含めて）は加曾利EⅡ式を主とし、わずかに堀内式・加曾利B式を加える程度であった。

東 遺 跡

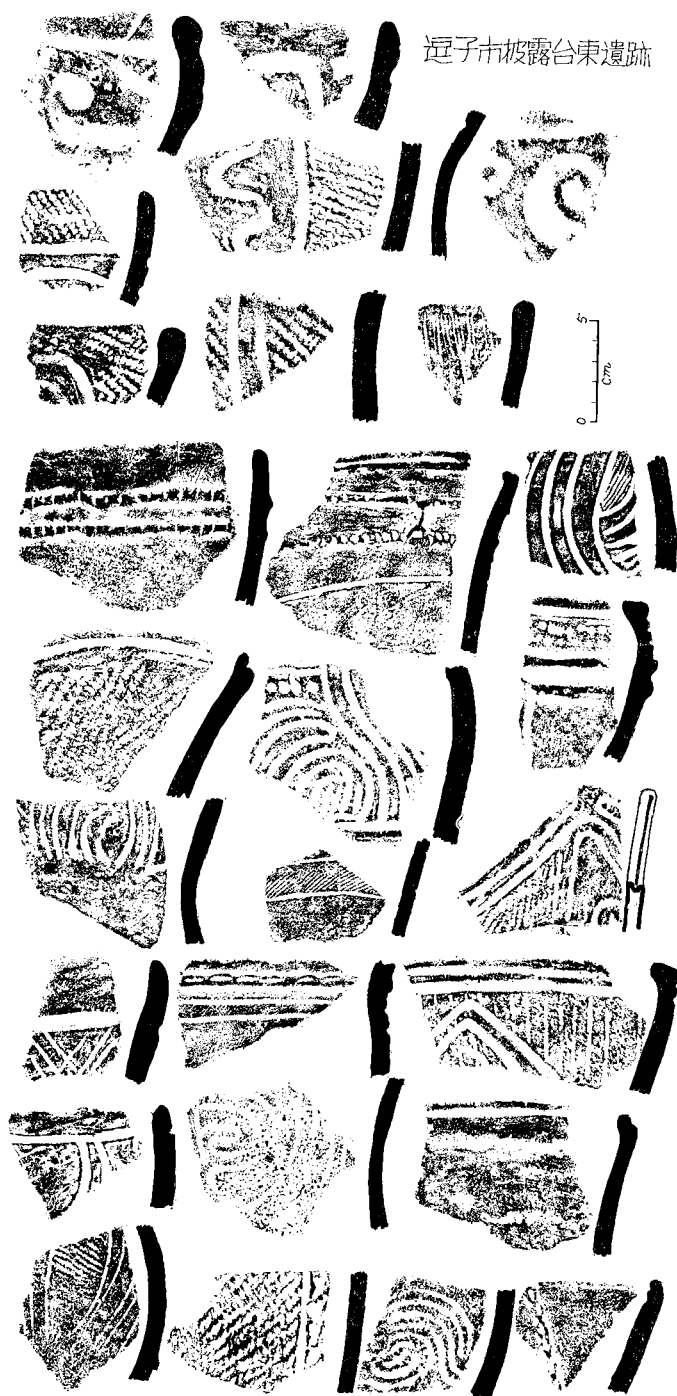
西遺跡との間に土器片の散在しない部分があるから別の遺跡と考える。東遺跡（地主宮崎省三氏、新宿4-1779）は高橋馨氏宅南側、宮崎省三氏宅西側にあたる畑地。畑表面にわずかの土器片・須恵片・縄文土器片を認めて発掘調査したもの。西遺跡部分から東方へ突出した小さい半島状地形である。



披露台東遺跡

調査 東西に幅1m長さ13mの第Ⅰトレンチ、中央にこれと直交する第Ⅱトレンチ長さ12mを作る。第Ⅰトレンチは東端のみに土器片少々出土。一90cmにてロームに達した。第Ⅱトレンチは北端のみに土器片少々出土。出土品は加曾利EⅡ式土器片・石錘・土錘。これによって第Ⅰトレンチ西半と第Ⅱトレンチ南半を放棄。第Ⅰトレンチの東端に南北方向に第Ⅲトレンチ設定。表土20cm、包含層はその下約15cm間の黒色土層、検出土器片は五領が台式(?)・加曾利E式・堀内

逗子市披露台東遺跡



披露台東遺跡出土土器片

式。他に磨石斧半欠1、打石斧半欠1。第Ⅲトレンチの北端に東西方向に第Ⅳトレンチ、第Ⅲトレンチ西のに平行に第Ⅴトレンチ設定。

第Ⅳトレンチは西半に土器片すくなく、包含層（黒色土）はトレンチの中ほどにて消滅することを確認。包含層中より堀内式土器片検出。第Ⅴトレンチは南半に土器片出土すくなく、北半に多い。北半中央部にて黒色包含層の下方に更に第2包含層（-50~70cm）を確認。第2包含層より加曾利EⅡ式土器片出土。その下に更に五領が台式に近い土器片を確認（-83cm）、その下方にローム層をほりこんだ竪穴家跡の一部とみられる縁辺部を検出したが床面の確認できず。土器片検出なし。第Ⅳトレンチの東半部の南側に第Ⅵトレンチ設定。上部包含層（黒色土・厚さ15cmほど）は堀内式を主とし、加曾利B式を混ざることを知る。下部包含層に加曾利E式を確認。かくて遺物包含層の主要部分は第Ⅰトレンチ東半、第Ⅲトレンチ北半、第Ⅳトレンチ東半の範囲にあることがわかり、この範囲内を発掘。その結果、包含層の主要部は第Ⅵトレンチの南側を中心とする径3m~4mの範囲と知られ、15cm内外の第1包含層（堀内式・加曾利B式）と、20cm内外の第2包含層（加曾利E式）を確認したが、第2包含層土器片埋蔵量は頗る粗であることがわかった。

遺物 土器片…何れも細片であり形式を確認できる程度のものはわずかである。第1包含層からは堀内式を主とし、わずかの加曽利B式を混じたほか、五領が台式かとみられる小片と加曽利EⅡ式とみられる小片を混出した。第2包含層からは加曽利EⅡ式をわずか検出した。第2包含層下の褐土層からは五領が台式かとみられる小片を検出した。これらの出土層序は従来の土器編年とくいちがってはいない。

石器……第1包含層から磨石斧半欠1、打石斧半欠1、石錘1を検出した。

土製品……第1包含層から土器片を利用した土錘を検出した。

ま と め

披露台遺跡の主要部分は西遺跡であったが戦時中破壊されて失われ、北方民家の間にわずかの包含層を残していたが、包含層からは堀内式と加曽利B式を検出し、東遺跡からは狭い範囲であるがロームに近い部分から五領が台式かと思われる小片を検出し、その上を覆う第2包含層からは加曽利EⅡ式を、更にその上の第1包含層からは堀内式を主としわずかの加曽利B式を検出した。

以上によってこの地は縄文中期初頭にまず住居地にえられ、後中期後半に再び住居地となり、更に後期前半に住居地となったことがわかった。この地の生活をささえた水は西遺跡の南崖の湧水と東遺跡東南の湧水（現在孟宗竹林）とであったと考えられる。

付 記

発掘 昭和47年4月1日～3日

発掘者 逗子市教育委員会

発掘担当者 赤星直忠

参加者 小川裕久・臼井惣次・宇内城一・宇内正城・同達也・川上久夫・川口徳治朗・軽部一一・剣持輝久・小林直昭・竹沢嘉範・塚田明治・橋本良雄・浜田勘太・尾形・鎌倉学園（盛田精治）・逗子開成（石郷岡政彦・高野格・西村弘・万年和義・宮本守雄）・県立横高（横山昭一）・茅ヶ崎高（和泉弘子・神前香代子）

披露山A地点遺跡

動 機

昭和44年4月末、横須賀考古学会員宇内城一氏から、披露山が宅造されており、土師器片が散在しているという知らせがあったので早速同行し、破壊状況を見、調査の必要を感じたによる。

所在と遺跡状況

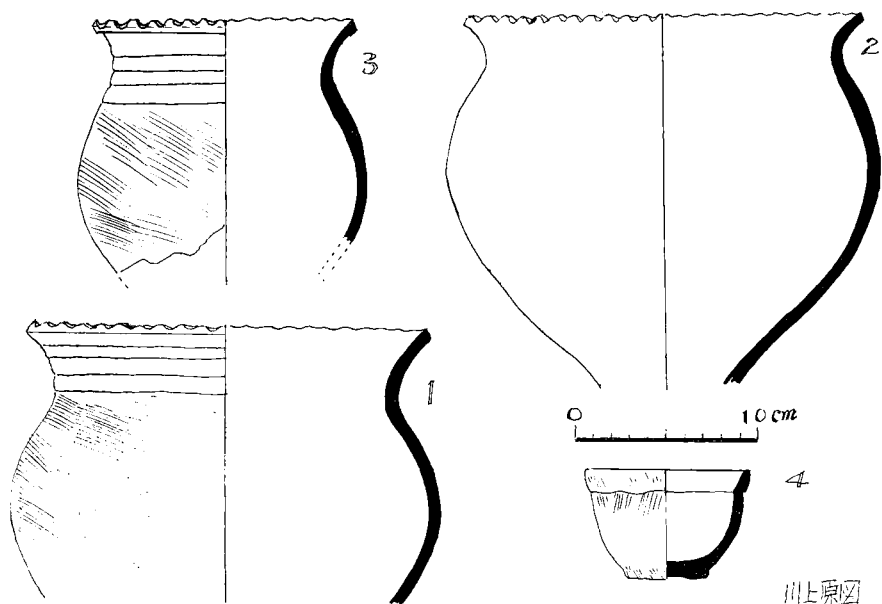
逗子市新宿4丁目1650～1651のあたりであり、これを披露山A地点遺跡と称する。

披露山公園のある山頂を最高峰（標高92.7m）とする披露山尾根はほぼ同じ高さをもって西にのび、大崎山の基部に達していた。支尾根はこれらの高部から南と西と北にのびていた。東北にのびるものは小坪切通にあるバス停「披露山公園入口」から披露山にのぼる路の通ずる尾根であり、披露山公園との間に古くから披露部落のある所謂「披露台」とよばれるものである。

西北にのびるものは披露台の西に狭長な谷をへだてて、小坪小学校との間を北にのび、湘南サナトリウムの背後に達する尾根である。今回宅造されはじめたのはこの西北にのびる尾根の基部であり、披露山公園北西側から西北にこの尾根を湘南サナトリウム背後にむかって直線に走る路の東側（新宿4丁目）にあたり、尾根中央の高部分（標高50m）の南側部分にあたるやや平坦な畑地部分である。

経 過

踏査の際すでに南側は削平されており、高部分の南側畑にもトンボが設定されていた。この畑地をふ



披露山A地点出土（1・3弥生4土師）



披露山A地点（弥生堅穴家跡）

くむ一帯の周辺畑地（路の西側は小坪3丁目）に広く土師器小片が散在していたが細片すぎて時期は不明であった。ここにおいて緊急調査の必要を感じ、手続を了した上、横須賀考古学会による発掘調査を6月1日に実施し、2日に実測を了した。

調 査

高地の南側畑地を東南から西北へ走る路の東側（正確には東北側）畑の南半部（特にその東半）に土師片の散布が目立っていたので、この部を発掘区と定め、東西に8区（西よりA、B、C…）、南北に8区（北より0、1、2、3…）の2m方眼区を設定し、Hトレンチ（0～7）・Eトレンチ（0～6）・6トレンチ（B～H）・0トレンチ（B～H）の4トレンチを試掘。Hトレンチはまばらに土師小片を検出しただけで遺構なし。EトレンチではE2区・E3区は西半の50cm下に土師小片がやや密に埋没。E2・E3境の東側にて径60cmくらいの焼土を検出。炉跡と思われた。その下はローム面にて堅穴床とみられたが周壁の検出できず。土師は五領式とみられた。

E6区中央より少し西に径45cmほどの焼土を検出。これはその南側に長手の岩塊1個をおいた炉であった。地表より床面まで40～45cm。床面は堅いがその下はやわらかで貼床と思われた。炉の北側に接して弥生式土器（久々原式）甕形2個体を検出。E5区南端に堅穴縁検出。6区にも縁を検出。ロームを20cmほど切りこんだ隅丸方形の堅穴家（畑表面よりローム面まで25cm）と判明。東と南の縁は判明しない。地表からロームまでが浅いため耕作によって失われたものと判断した。5F・6F・5G・6G・7Gにも延長したが土師小片を稀に検出しただけ。B6区では脚台その他破片少々を検

出。B1区では50cm下から素焼小皿形完形1個体検出。これは鎌倉期の素焼小皿（所謂かわらけ）。西北側に竪穴の一角と思われるピットを検出。床らしい部分まで約1mの深さ。このピット中より鉢半欠、高坏脚断欠出土（五領式）。A1区へ延長したが竪穴らしいものは確認できず、B3区は表土中に土師小片を検出しただけ。地下50～60cmにて堅い面にあたったが掘ひろげることとはしなかった。

結核F6区を中心とした部分に久々原期弥生式土器壺2個体を炉端に残した隅丸方形の竪穴家が検出されたこと。E3・E2を中心とする五領式土師器の竪穴あとがあったが周壁部は確認されなかった。B1区に竪穴の一隅らしいものが出たがその広さは確認できなかった。即ち、一部に弥生式後期の住居跡を残しているが、これに近接して広い古墳時代初期の住居跡群があるらしいが、竪穴家周壁は耕作によって失われており確認できなかった。

この調査中確認できた遺物中、弥生の竪穴家跡出土の土器は何れも甕形である。頸部に輪積あとを装飾として残すものと、これのないものとあり、前者は胴下部以下を欠き、後者は底を欠く。別に前者と同形の甕の約三分の一を欠くものがあるがこれも胴下半以下を欠く。久々原式に属する。土師器は多く断片であり、鉢1個のみ復原された。口径9cm、高さ6cm、底径4.3cm。口縁外に幅広く土を貼付けて厚くしており、底はあげ底である。五領式。

ま と め

披露山A地点は尾根上の平坦地であり、早く弥生式久々原期の竪穴家があったことがわかり、後土師式五領期にやや広く竪穴家群があったと思われるが、後世の開墾によって多く失われ、竪穴家の存在は認められたが確実な平面形としては把握されなかった。しかし広く土師器片の散在により、竪穴群の存在が推察された。A地点の東方狭谷にのぞむ山腹に孟宗竹林が存在するから、ここに湧水があることがわかる。おそらくこの湧水が彼らの飲用水であったであろうし、この谷戸田の水源であったであろう。彼らはこれらの谷戸田を耕作していたものであろう。

付 記

参加者 赤星直忠・臼井惣次・宇内城一・岡本勇・小川裕久・川上久夫・剣持輝久・古暮慶明・竹沢嘉範・塚田明治・浜田勘太・菱沼悦夫・逗子開成高校（荒井進・石渡賢治・大塚弘・奥野木昭雄・荻原英生・椎野孝・多田政一・長谷川哲夫）・横須賀市立工業高校（鈴木志津雄・中村晃）・横須賀市立第一高校（伊藤キヨ・北川真弓・出口博美・中村節子・山本和枝）

小坪小学校裏山遺跡

(披露山C・E地点)

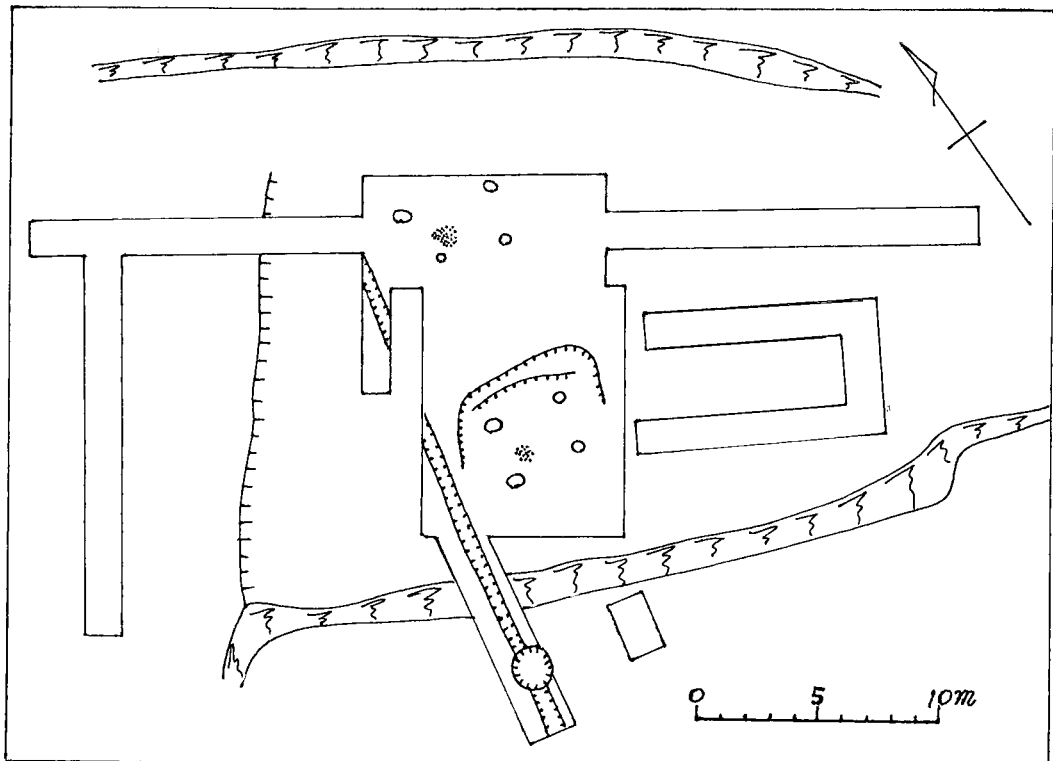
位 置

小坪小学校裏山。披露山公園の西側につづく尾根から北にのび、小坪小学校裏山を湘南サナトリウム裏山にまでつづく支尾根であり、遺跡は披露山公園西北山腹から支尾根上を西北に通って小坪小学校北側に下る路にそって分布しており、逗子市新宿4丁目から小坪3丁目にわたるものである。

発掘前状況

昭和46年6月このあたり一帯にブルドーザーが入っているときいて踏査した。この路の東側支尾根基部にあるのがA地点（弥生及び土師）であり、これは先年横須賀考古学会が調査したところであるが、このあたりは既に埋められていた。A地点の北側に頂が平になった高い部分があった。これをB地点とした。この部分に以前、土器片散在を確認していなかったが地形上、遺跡の存在が予想された地点であったが、削平された地形とわかり、土器片の散在は認められなかった。

E地点は削平高地の西側にある畑地。路の北側に接し、畑表面に土師か弥生か不明の極めてわずかの



披露山C地点

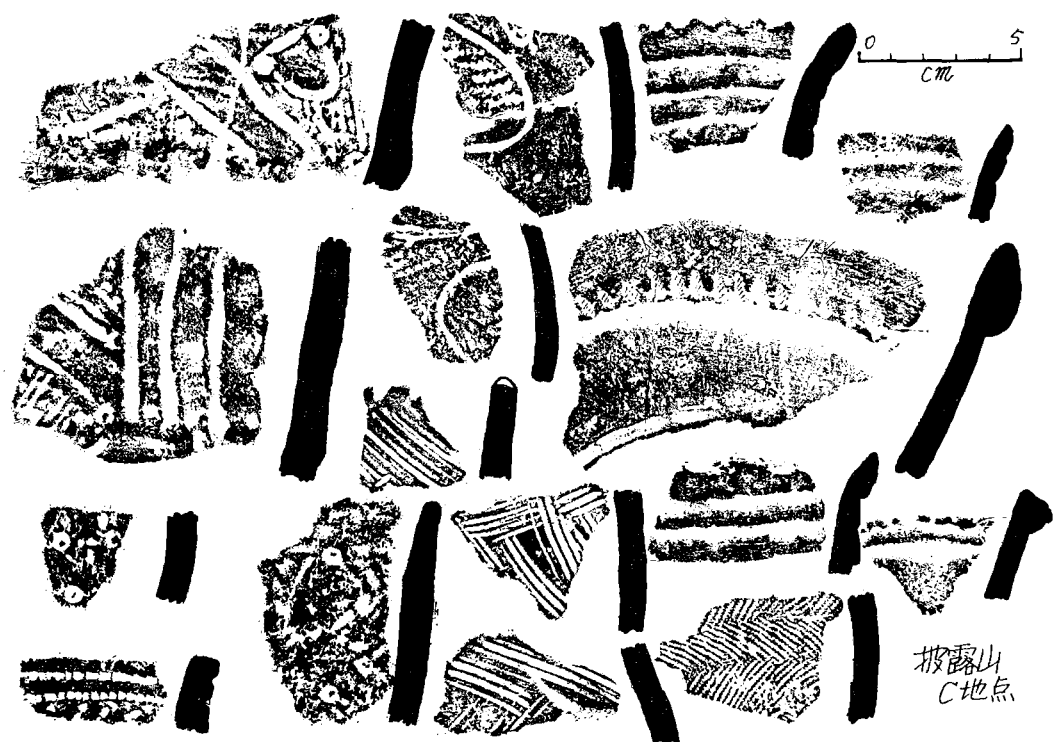
小土器片がみられた地点であったが、80cm～100cm 削平せられており、削平面に焼土が数か所露出し、削土中に土師とみられる小片が散在した。

C地点はE地点と路をへだてた南側であり、ゆるい南傾斜の畑地である。A地点の西、路をへだてた西傾斜の畑につづく部分であり、一帯にA地点につづく土師片の散在地であった。踏査時、A地点につづく西傾斜の畑地は削られて失なわれ、C地点は縦横にブルドーザーが削り通った土取場となってひどい荒地となり、ブルドーザーで削られた断面には土師器小片が点々と埋没しているのがみられた。南方には南側の山腹を削った土がおしだされてきていた。

調 査

昭和46年7月20日～28日実施。

B地点 東西、南北に十字形に軽ブルドーザーをもってトレンチを設定したが、約30cmにてローム層に達した。土層中に土器片を全く検出しなかったので調査を放棄した。

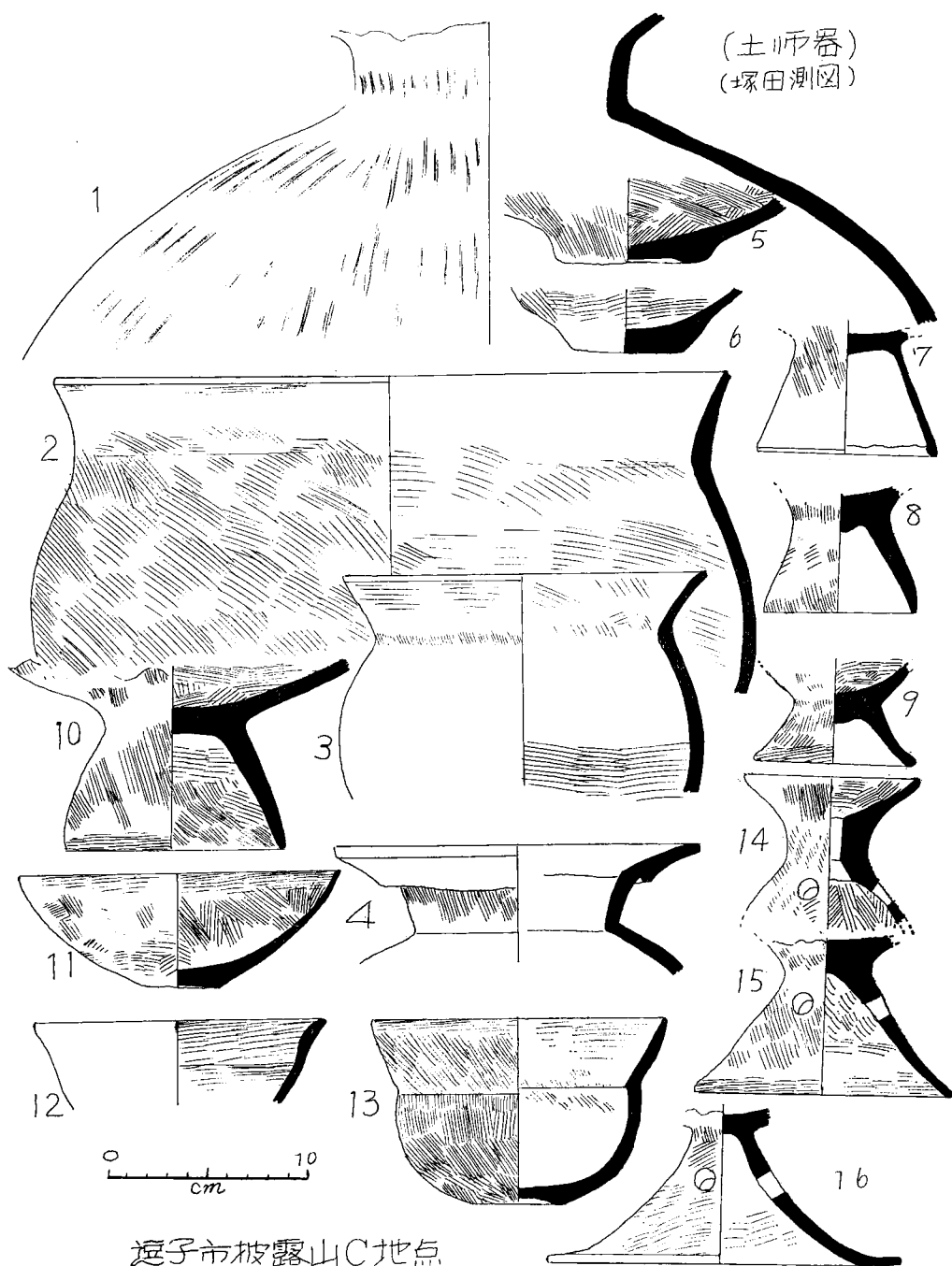


披露山 C 地点出土土器

E地点 南北方向に幅1.5m長さ10mの第1トレンチを設定した。南半に薄い黒土層を残し、土師器小片（五領式とみられるもの）が埋没しており、火焚あと乃至炉跡とみられるもの4か所あり、南端の焼土から北約40cmはなれたところに径35cmの柱穴1個確認。北端の焼土部分にて第1トレンチに直角の第2トレンチを十字形に設定したが遺構は検出できなかった。北半部分にはローム面まで25cmの黒土層



披露山C地点（上 発掘中、下 第2竪穴家跡）



逗子市披露山C地点出土土器

を残していたが、土師片も焼土も検出しなかった。

南半部の削平されない部分において断面をみると、畑表面から25cmは淡褐色の耕土（Ⅰ層）、その下に30cmの耕作をうけない淡褐色土（Ⅱ層）があり、この層中には土師片を包含し又焼上らしいものを混在した。その下に10cmの無遺物褐味黒土層（Ⅲ層）があり、その下に褐色のⅣ層が75cmあって、ローム層（Ⅴ層）になっていた。第Ⅳ層の上部10cmは第Ⅲ層からの漸移部分であった。第Ⅳ層中35cm下に縄文土器と思われる無文の小片を認めただけで他は無遺物。

E地点は削平されたため、竪穴家は確認できなかったが、ここに竪穴家があったことは充分推察できる。

C地点 路の南側は高さ1m余の切岸状をなし、その下から緩傾斜の畑地であったが今は一面に草地となっていた。切岸下から8mほどへだて北東―南西方向に幅1.5m 長さ40mの第1トレンチを設定。10mごとに東から1区2区3区4区に分けた。西端から2mへだてた部から南西へ幅1.5m 長さ18mの第2トレンチを設定。北から10mを1区、残りを2区とした。軽ブルドーザーをもって設定トレンチの草根を含む表土を削りとった。この結果第1トレンチ1区と2区東半部は30cmにてロームに達し、これを覆う黒土層中には何も検出しないので放棄。第3区西半と第4区は黒色土中に何も検出しなかったので放棄。2区西半から3区東半にかけ35cm下から土師片、弥生片を検出。更に3区東半より焼土を検出。土師片は五領式と判明。第2トレンチ1区と2区は50～60cmでロームに達することを知り、その上を覆う黒土層は軟質砂土層であり、この中からは江戸期染付け陶片1、時期不祥の須恵質小片2を検出したにすぎなかったもので、これを放棄。

かくて2区西半と3区東半（長10m）を調査区とし、北側と南側に各1.5m幅の拡張区を設定した。調査区2区東半には何も検出しなかったが、西半からは―30cm～―40cmに土師器片が集合出土。3区東半に検出した焼土（―30cm）の北側（拡張部）に小焼土3か所と土師片（五領式）少々検出。これらの検出部分が表土下約30cmにある床面と推定されたので、この深さにて四周に拡張。南拡張区からは土師片少々検出。南・北拡張区及び調査区の2区東半黒土中から石器（石錘）と縄文土器片を検出し、又南拡張区中央辺の黒土中から弥生式宮の台期甕断片を検出した。（発掘時には南拡張区東端にて石錘1と鶺鴒が島台式土器片1片を確認しただけだが、後に土器片を洗ったとき更に縄文片を認め、鶺鴒が島台式2、諸磯式乃至五領が台式と推定される1片が確認されたが他に早期に属する無文断片数片がある。）

床面を追求中、2区西端部に柱穴1、同南拡張部にも柱穴1（―50cm）、北拡張部にも柱穴1、3区東半の南拡張部にも柱穴1を検出し、焼土を中心とする4柱穴を確認し、ここに竪穴跡を確認したが、床面は焼土周辺のみ確認できたが竪穴周壁は把握できなかった。これを第1竪穴家跡とする。床面から五領式土師器埴半穴を検出した。

次いで第1竪穴跡の南方に幅3m 長さ10mの第3トレンチを設定し、ローム面が南に傾斜することを知ったが黒土中からは土師片少々検出されたにすぎない。この新設定トレンチの南半に竪穴家跡の一部が埋没することを認めたので、第3トレンチの南半から東方へ幅4.5m 長さ14mの発掘区を拡張した。しかし拡張区の東約10mからは土師器片も検出できなかったなのでこの部を放棄し、第3トレンチにつづく

部分において竪穴家あとの確認につとめ、隅丸方形（一辺約5 m）の第2竪穴家あのを確認した。しかし南側の周壁はローム層内にきりこんでなかったため把握できなかった。床面は表土下1 mにあり、ローム土と黒色土とをまぜた土を踏み固めた貼り床で、貼り床の下にはローム面を削った甚しく凸凹のある面がある。この凸凹面上に厚さ10～15cmの貼床をしたものとわかった。周壁は西側で10cm、東側で25cm、北側は東が高く、西に低くなり、中央辺で15cmあった。竪穴家内には4個の柱穴があり、炉跡は中央になく、南西柱穴に近接する径50cmのものであった。第1竪穴家跡と第2竪穴家跡との高低差は100cm。両炉跡の間隔は約9mであった。第2竪穴家跡床面からは五領式の甕半欠・器台半欠などが検出されたほか、弥生式土器久が原期破片も検出された。第2竪穴家跡を覆う黒土層中からは鉄滓断欠4を検出した。

第2竪穴家の西側に近く、第1竪穴家の西方から通ずるらしい一直線の溝のあることがわかり、溝を露出させた。第1竪穴家西方では黒土層中にあったものらしく、明らかでなく、第2竪穴家の西北方からローム面を浅く堀り、次第に深くしている。第2竪穴家の西では土幅55cm、底幅30cm、深さ20cmの台形断面であり、更に南へ5mのびた点では深さ30cmとなっていた。溝の傾斜は約 $\frac{1}{4}$ 。この部分で径140cm（底径も140cm）の丸い浅井戸形となったが溝は更に浅井戸から緩傾斜地の下方へ一直線につづいていることが知れた。この丸い浅井戸形は水溜であろう。

C地点出土土師器 第1竪穴家跡及び第2竪穴家跡を覆う土層中、並にその付近土層中からでた土師器片は細片が多いが、形態のわかるものによるとそれらは五領式とよばれるものである。完形品はないが充分復原できるものはある。壺・甕・浅鉢・埴・高坏・器台である。

壺（1・4）は球形胴の上に短い頸が外開きに立ち上るもので、口縁外周を厚くしている。胴はへら磨きされる。底（5・6）は平底。あげ底状のものとそうでないものとある。

甕（2・3）は下半がないのでわからぬが上半でみると胴は球形かそれに近い形。大きい口が外開きに立ち上る。頸と胴との接点はやや丸く反る。外面はへら磨き又はうすい櫛目がある。内面にも櫛目が残る。底は平底のものもあるらしいが、出土資料でははっきりしない。脚台付のものが一般的ではなかったか。脚台はやや小形化しており、下端内面が折り返えされた形になっているものがある。脚台側面がゆるく内彎又は外彎するものもある。脚台内底が出べそ状に突出するものがある。

浅鉢（11・12）は外開きの側面が内彎しつつ立ち上るものと、同形で口縁でゆるく外反するものとある。小形の底はあげ底状になるらしい。内面には櫛目がよく残るが外面は多くへら磨きされるらしい。

埴（13）は半球形の胴の上部に外開きの大きい口が立ち上る。立ち上った頸はそう長くない。底はあげ底。外面に櫛目がよく残っている。

高坏（15・16）は2例とも坏部が欠けているからその形はわからない。器台と同じような裾ひろがりの脚であるが、器台より大きい。側面はゆるく外反し、3孔がある。（16）は外反した裾が大きくひろがる。これは丹塗であつたらしく丹色が残っている。

器台（14）は高坏の脚部と同じ形の脚であるらしい。3孔がある。上に小さい坏部があり、坏内底は丸穴を下に貫通する。丹塗であつたらしく、部分的に丹色が残る。

何れも薄手、へら磨きが一般的だが櫛目がかなり残っている。

ま と め

C地点においては尾根を通る路を背にした南緩傾斜地に営まれた2軒の竪穴家跡が明らかにされた。第1竪穴家（上部のもの）は床面と四箇の柱穴とは把握できたが周壁は明らかにできなかった。第2竪穴家（下部のもの）は近接して作られ、床面が第1竪穴家と1mの差をもって上下の關係にたてられていた。第2竪穴家は一辺約5mの隅丸方形であり、ロームをほりこんだ荒削の床にローム土と黒色土をまぜた土をもって貼り床としたもので、四箇の柱穴をもつもの。第1竪穴家の西から第2竪穴家の西に通ずる一直線の浅い溝があり、第2竪穴家の下方で丸い浅井戸形の水溜を作り、更に下方に通じていることが知られた。これら竪穴家床から検出された土師器は五領式であるから、これら竪穴家は五領式土師器使用者のものであると知られた。これら竪穴家の東南方50mほどに土師器散在地(A地点)があり、これも五領式である。E地点の土師器は細片のみであったがやはり五領式と推察された。A・C・E各地点とも同じ五領式期の竪穴家あとがあったことは尾根を通る路（故老はこれを旧道とよんでいた）が極めて古いものであり、この路をはさんで数軒つつ散在した竪穴家の村落があったと考えてよいものであろう。

尚本調査にあたり、C地点出土土器中にわずかながら、縄文土器片及び石錘があり、土器片は鶴が島台式（早期）と諸磯式乃至五領が台式（前期末乃至中期初頭）が確認された。又弥生式土器片もわずかに検出され、宮の台式（中期）と久が原式（後期）が確認された。これらの存在はこの近接地域に縄文早期と前期末乃至中期初頭の遺跡が存在し、又弥生式中期と後期の遺跡が存在することを暗示するものである。

土師器が何れも五領式であったことは弥生時代に引きつづいて古墳時代初頭にこの地に住民のあったことを証するものであり、旧道と伝えられる尾根路が意外に古い時期からの路であるとするようになるのではあるまいか。

付 記

発掘者 県教育委員会・逗子教育委員会

発掘担当者 赤星直忠

参加者（県教委）小川裕久・白石浩之（横須賀考古学会）臼井惣次・川上久夫・川口徳治朗・剣持輝久・塚田明治・（東海大）笠原英二・柏葉成人・菅田薫・平方幸雄

尚調査費用はTBSから出されたほか人夫及び軽ブルドーザーを提供された。

伊勢山遺跡（披露山D地点）

位 置

逗子市小坪4丁目、伊勢山。天照大神宮東側尾根。伊勢山は披露山を最高峰（92.7m）とする東西に長い標高90m～80mの尾根が急に50mにさがった部から西へのびる尾根である。この尾根の西端に近いところに天照大神宮があり、その周辺は城郭の一部であるかの如き切岸となり、西及び北側の切岸下に腰くるわ状の平場をめぐらし、東方は尾根の基部側に空堀状の幅広い堀切部がある。堀切部の東側尾根はゆるい傾斜をもつ山頂の畑地であり、時期不詳の土師器細片が散在していた（昭和30年代状況）。

発掘前状況

昭和46年6月、伊勢山尾根をブルドーザーが削っているときいて踏査。山頂の土師器片散在部である空堀状堀切部の東は一部を残し既に土取のため1m乃至2mが削られており、この部分の西端にだけ土師器小片が広く粗に散乱していた。小片すぎて時期不詳。この部分が土師器包蔵地であったことは明らかであるが、既に破壊されてしまったので調査ののぞみはなくなっていた。この地はTBS団地造成の西端である。

調 査

TBS団地は披露山公園の西側から伊勢山天照大神宮東側にわたる地域を北は小坪小学校裏山から湘南サナトリウム裏山にまでのびる尾根、南は披露山公園から南へのびる尾根、西は大崎山基部東側の支尾根にわたる広い範囲である。

この範囲に含まれる遺跡は先年横須賀考古学会で調査した弥生及び土師遺跡（A地点）、この西北につづく土師遺跡（E地点）、E地点の南、A地点の西につづく土師遺跡（C地点）、披露山公園西側尾根にあった大塚（経塚）、伊勢山の土師遺跡（D地点）があり、尾根路の南側につづく支尾根にも遺跡存在が予想されていたが未調査だった。ここに記す伊勢山遺跡はD地点であり、調査は昭和46年7月20日実施。削平残部を発掘し遺跡を確認するために行なわれた。

第1区は削平残部の北端に幅1.5m 東西22m（Aトレンチ）とその中央にこれと直角に幅1.5m 長15m（Bトレンチ）をT字形に設定し、発掘したが、上部が削られていたため25cm～30cmにしてローム層に達した。Aトレンチは南端にて土師小片をわずかに検出したにとどまり、上部分の黒土中から染付陶片1、淡黄色陶片1、灰釉陶片1（何れも江戸末期）を検出した。Bトレンチは北端近くのローム直上に鉄滓小片1を検出したにとどまった。

第1区トレンチ設定以外の部分は既に深く削平されローム層が露出していた。

第2区は天照大神宮東側の空堀状部に設定。一面に篠と雑草の茂る荒地になっていたため、TBS団地工事担当の住友建設からの援助による軽ブルドーザーによって、東西一南北に各10mほどの十字形トレンチを作ってもらい、土層状況と土器片包含状況をみた。約120cm掘り下げたが50cmほど下に稀に土

師細片を認めたにすぎず、下部は湿った粘質土層になっていた。

ま と め

伊勢山土師散在地として記録されたこの地一帯は調査前に土取場として削りとられたため、残部発掘によっても残された極めてわずかの時期不詳の土師器細片を検出したにすぎなかった。

付 記

発掘者 県教育委員会・逗子市教育委員会

発掘担当者 赤星直忠

参加者 (県)小川裕久・白石浩之・(横須賀考古学会)川上久夫・塚田明治・(東海大)菅原英二
・柏葉成人・菅田薫・平方幸雄

尚発掘費はTBSから出された。

諏訪神社西遺跡

小坪4丁目仏乗院裏山。山頂部に諏訪神社がある。天照大神宮社の東南方である。諏訪神社の西約100mに土師器片須恵器片の散在する畑地がある。小坪4丁目15-17 一柳氏の北隣である。畑は一柳三次郎氏所有地。土器片は細片で時期が明らかでないが、破片に櫛目のあるもの、所謂S字状口縁のあるものがあり、時期不詳の須恵器断片もあるから、新古のものが埋没しているものと判断される。

大崎の土師遺跡

大崎山は地形からみて何らかの遺跡があつてよい位置であるが山頂部北よりの畑地に土師片(時期不詳)をわずかに認めただけである。

昭和初期友人鳴原氏が大崎の先端に土器が出ると教えてくれたので、いっしょに見にいった。海にのぞむ崖下で、岩と草根との間に土師器の小片が埋もれているのがみられた。おそらく山上からおちてきたものと考えたが、今その位置はわからない。自動車専用道の外側であろう。赤星ノートには写真がはってあり、浪子不動裏としてあるが不動(高養寺)裏にはそれらしいところが見えない。

新宿横穴群

所 在

逗子市新宿5丁目。稲荷社境内及びその南方山端の馬淵建設KK所有地内にある。披露山公園から南東にのびる支尾根が海岸に達した部分の先端に横穴群がある。新宿5丁目の東端であり、新宿2丁目14と新宿3丁目4との間の道が山裾につきあたったところの山腹に稲荷社があり、その南の山端にもと岸清一氏別邸（戦後日興証券KK海の家となり、馬淵建設KKの手に移り、とりこわされ、アパート建設予定地となる）があった。大正12年大地震による山腹崩壊によって横穴群があらわれたもの。稲荷社境内のものは中学生によって内部が掘られたものを一部赤星が大正14年に調査し、後前面が土取場になったとき羨道部から土器が発見された。岸別邸内のは昭和3年東京帝国大学生によって発掘された。

分布と過去の調査記録

調査記録(1) 大正14年2月、稲荷社わき山腹横穴から中学生が土器類を発掘した旨新聞紙で知り、直ちに実地踏査。稲荷社北側山腹に横穴4穴があり、右端1穴以外のものは内部がひどく掘りあらされているのをみた。同年9月から12月までを費し、これらの穴に残された遺物を記録する目的で内部を発掘調査した。このころ土工がこの山腹を切崩しつつあったので、作業の邪魔をせぬ程度に調査させてもらった。（報告は考古学雑誌第16巻4号「逗子町の横穴」赤星直忠、大正15年4月）

第1号穴（通19号穴） 天井はドーム形。前幅が狭くなっている。右前壁は残っているが左前壁は玄門部が少し張り出した形。奥行4.2m、奥幅2.8m。入口に頭をむけた4体がならんでいた（左から数える）。1号骨の大部分は朽ちてなくなっていた。左壁に近く直刀1（長さ78cm）と銅釧2個をはめた前膊骨が残る。直刀切先付近に骨製へら状のもの1と碧玉岩製曲玉1を検出。2号骨は大部分朽ちている。頭骨の前方に鉄製圭頭の柄頭1、右側に金銅環1、頸辺に玉類多数（めのう製曲玉2、ガラス製小管玉1、水晶製切子玉2、こはく製棗玉4、ガラス・石・土製丸玉39、紫・碧・水・黄褐色ガラス製小玉79）。鈴釧（6鈴）1をはめた前膊骨が残っていた。3号骨は朽ちてほとんど何もない。4号骨は朽ちてはいるが粉状になって残る。頭骨わきに金銅環1、腹部・胸部に玉類少々（水晶切子玉1、こはく棗玉5、蛇紋岩製丸玉7）、右壁との間に刀子2、尖根鉄鏃17を検出。

第2号穴（通20号穴） 穴の天井形態は1号穴と同じ、玄門で左右壁が前に張り出しそのまま羨道になる。前壁はない。奥行3m、奥幅2.6m、右壁に近く入口に頭をむけた1体が残る。頸部に玉類がある（めのう製曲玉6、こはく製棗玉4、水晶製切子玉4、丸玉4、黄・紫・緑・水・碧・黒褐色ガラス製小玉53）。左前膊骨に細い銅釧2個がはまっている。右わきに須恵器小形蓋坏（蓋なし、径10cm）1個。左奥隅に平根式鉄鏃3個。そのわきに粉状人骨の残りを検出。

第3号穴（通21号穴） すっかり掘りつくされている。左奥から土師器坏断片1と鉄鏃1を検出。

第4号穴（通22号穴） 穴の形は2号穴と同じか、奥行2m、幅2m。頭を入口にした3体が残る。

保存やや良好。1号人骨胸に刀子をのせている。2号骨は何もない。1号骨との間膝あたりに須恵器甕が碎けて検出。3号骨右膝わきに口の欠けた退化横瓶1個検出。

第5号穴（通18号穴） 第1号穴の左に発見。奥壁半円形。奥行2.6m、幅2.4m。入口に頭をむけた人骨4体、直刀断欠1があっただけ。

昭和3年9月17日、新宿横穴から又土器発見の由、新聞に出る。逗子小学校校長荒井友三郎先生と同行。稲荷社わき山裾土取作業中の土工より出土状況をきく。

第1号穴（通19号穴） 羨道左側より玄室内左側に掛けて須恵器4個（かぎ耳付提瓶1・平瓶2・瓶1）発見。

第2号穴（通20号穴） 玄室内右壁に接して須恵器2個（平瓶1・瓶1）、奥壁近くから水晶切子玉1発見。

第5号穴（通18号穴） 1号穴の左。前半部に頭を右及左にむけた2人骨発見。

この時発見された土器全部が逗子小学校に寄贈された。

（赤星が発掘した出土品は後日全部、帝室博物館一鈴釧・銅釧・金銅環・銀銅環・玉類全部一と東京帝国大学考古学研究室一須恵器・土師器・直刀・刀子・鉄鏃等全部一に寄贈された。尚逗子小学校に残っていた土器類は現在社会教育課に移管されているが、昭和3年新宿横穴出土のものがどれであるかの検討は終わっていない。）

調査記録(2) 馬淵建設KK所有地となった旧岸清一氏別邸内には、西端崖上に3穴（第1号穴～第3号穴）、中央の浅い谷奥に4穴（第4号穴～第7号穴）、谷の右山腹上に3穴（第8号穴～第10号穴）右端の崖に7穴（第11号穴～第17号穴）があり、稲荷社境内の5穴（第18号穴～第22号穴）とともに計22穴の群であり、何れも山裾から5～6mに位置する。16号穴だけは低いところにあった。

岸別邸内横穴群は昭和3年9月、原田威人助教授に伴なわれた東京帝国大学生によって発掘された。この日の参加者は（宮内省諸陵寮）井上氏・（一高史学教室助手）杉勇氏・（国史科学生）岩崎航介氏、三上次男氏、喜田新六氏、宝月圭吾氏・（東洋史科学生）江上波夫氏・白坂農太郎氏・関谷氏・（西洋史科学生）松井氏・（その他学生）長谷川氏他2名。この発掘のための諸交渉や諸々の面倒をみたのは当時逗子開成中学校講師をしていた岩崎航介氏。赤星は稲荷社境内横穴を以前に発掘した関係で案内として参加。当日の結果は次の通り。

第2号穴及び第3号穴 火葬の痕跡がある。

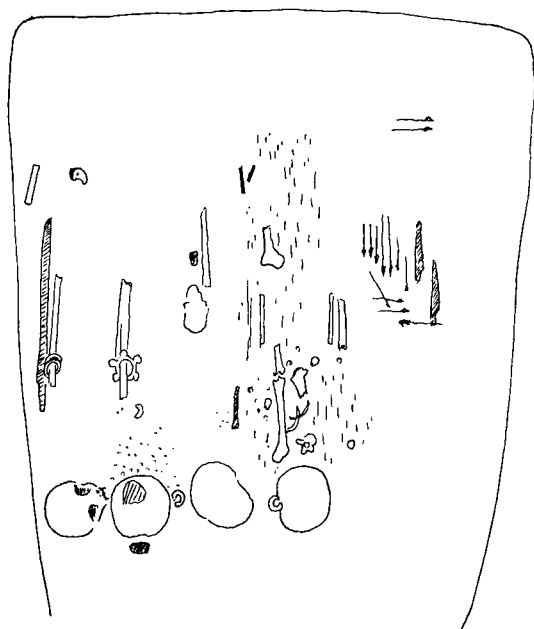
第6号穴 土師器坏1・金銅環1出土。

第10号穴 銅釧出土。

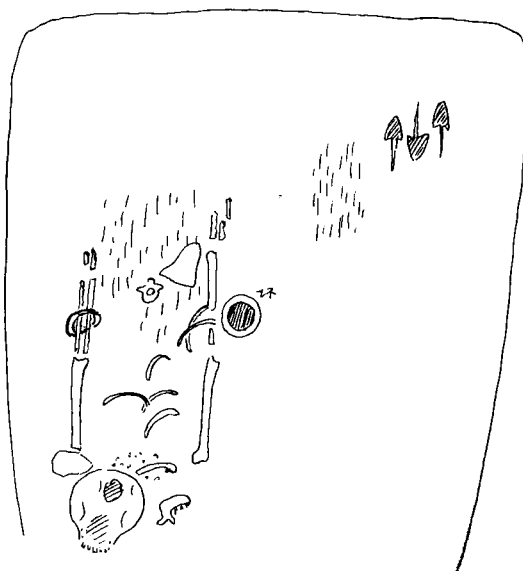
第13号穴 何もない

第16号穴 火葬痕跡がある。土師器坏出土。

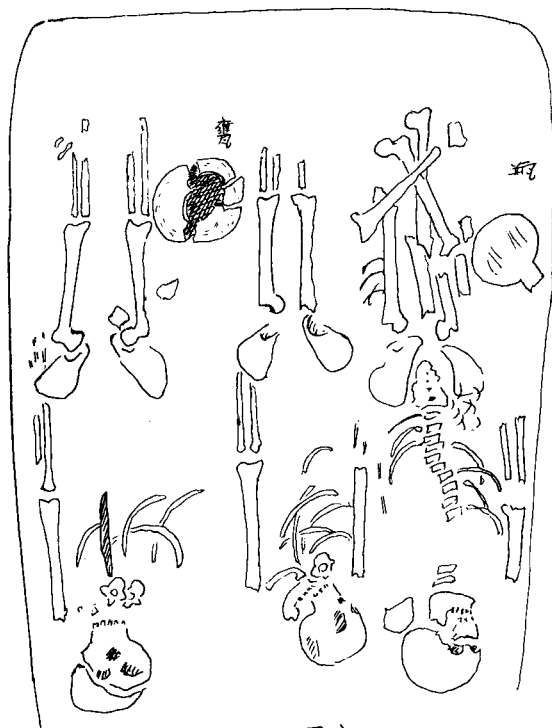
第6号穴記録 山腹中央の浅い谷奥、やや高いところにあった4穴の右から2つ目。江上波夫氏発掘。前半や天井部の記憶がないがノートには奥半部の平面図がかかっている。奥壁に接して低い壇がある。壇の前面右隅に近く金銅環（外径2.4×2.2cm）1個と40cmはなれて土師器坏1個出土。坏は丸底で



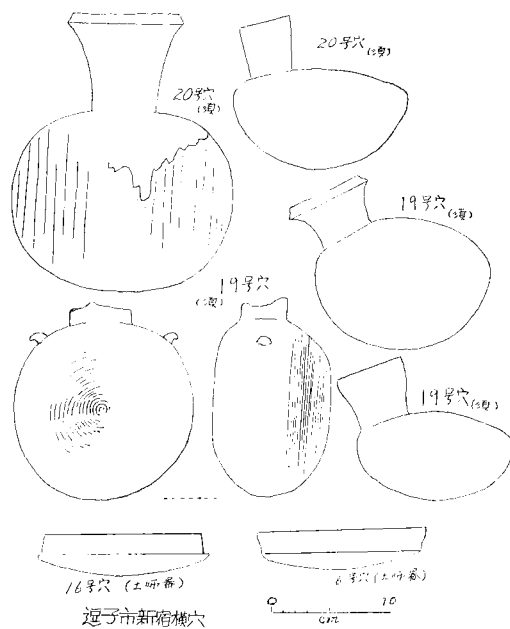
19号穴



20号穴



22号穴



16号穴 (土師器)

延 新宿横穴
遺物配列図と土器

腰で少し張出し、側面は外反しながら立上るもの。口径14.5cm、高さ3.5cm。

第16号穴記録 門を入ってすぐ右側崖下に全く土で埋もれた横穴の断面（幅120cm）のあるのを知って赤星が調査した。全く流入土で埋もれていたものが山腹を切りとられた崖面に残っていたもの。土を出すと横穴の奥部分が50cmほど残っていた。残っていた横穴の奥床面には左・右・奥の壁との間に10～15cmをあけて、全面に火葬骨が敷かれたように埋納されており、右壁から60cm、奥壁から30cmはなれて、火葬骨の上に土師器坏1個が伏せられていた。横穴形態はわからないが壁上部が彎曲して天井に移行するものであった。横穴に火葬骨が埋納された好例として記録された。出土土師器坏は丸底で腰が張り出し、側面の立上りは内に傾斜する（口径13.7cm、高3.7cm）。この形態の土師器と火葬骨とが関係があることは重要な事実である。（この坏は現在鬼高式と呼ばれている形式のもの）

新宿横穴群の現状

昭和47年1月現在。稲荷社わきの横穴群。社の左と右上とに軍防空壕の口が残っている（これはこの山腹をくりぬいて海岸に面した山腹に銃眼を開く、米軍上陸に備えた抵抗陣地の一つであり、現馬淵建設所有地背後山腹に銃眼が残っている）。稲荷社の右方（軍防空壕の下方）から5穴ならんで横穴位置はわかるが、前面が崩壊し、岩塊に埋もれて、わずかに天井部分がみられるにすぎない。馬淵建設所有地内の17穴はその後山腹が削られたため失なわれたり、流入土で入口がふさがって、存在の知られるのは左端の3穴（第1号～第3号穴）だけである。

小 坪 う ち で 横 穴 群

所 在

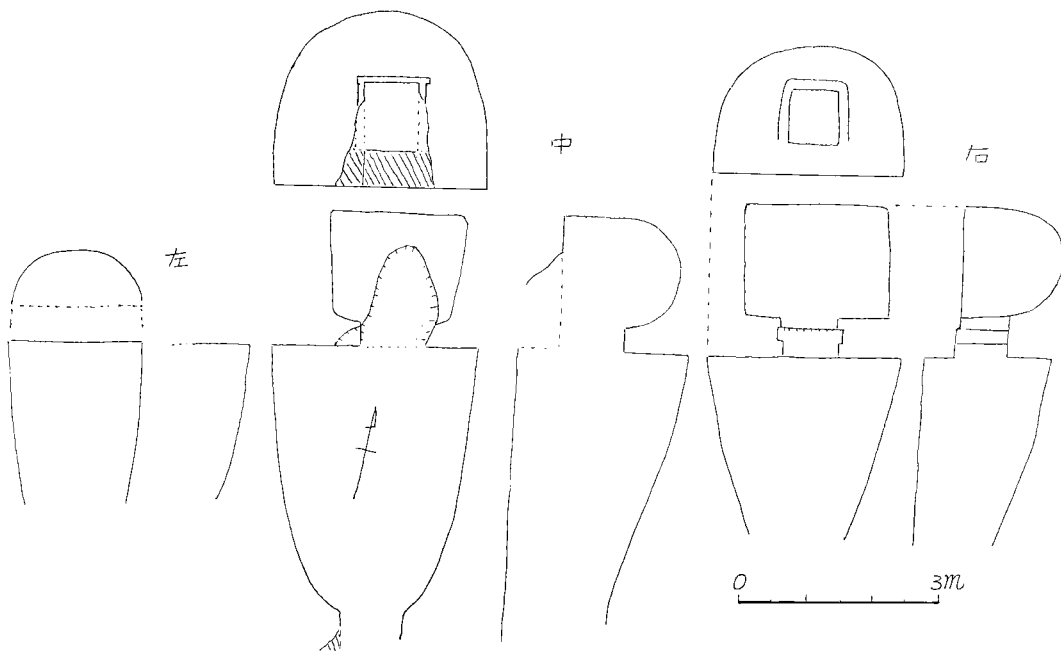
逗子市小坪2丁目・小字うちで。

地 形

小坪切通の西方、湘南サナトリウム（小坪1034）の前方（北）にある小谷を「うちで」とよんでいた。谷奥に北から小さい尾根が突出して谷奥を2つにわけていた。この小尾根の先端から少し入った部分の東側山腹に、やや大きい松の木があり、そのすぐ上に横穴が3個ならんでいた。これが小坪横穴群である。所在地の岩質は泥岩。

調査経過

昭和5年6月5日横穴の存在を知った。すでに開口しており、各穴は土が厚く流入していた。昭和7年12月4日各穴を測図。谷中は畑地であり牛尾平八氏（小坪西谷戸）所有地であった。昭和29年11月25日横穴の現存を確認したが戦事中防空壕に使われた由で、内部の土が大半かき出されていた。近年名越切通から小坪切通にわたる一帯が宅造工事によって削平され、この谷もすべて宅地化されたが、山腹にわずかに所在がわかる程度に残っている。



小 坪 う ち で 横 穴 群

横穴の記録

(赤星ノートによる)

左横穴

奥において幅と高さが最も大きく、前方に次第に幅と高さを減じて入口に至る、断面アーチ形の膨脹筒形構造（奥幅200cm、奥行256cm、羨門幅152cm）。奥壁はアーチ形（高140cm）の平面である。羨道と玄室の区別はなく、側壁は奥から羨門まで一つづきである。奥壁前傾及び玄室奥の張出しについては記録されていない。主軸正南。

中横穴

奥において幅と高さが最大で、前方に次第に幅と高さを減じ、羨門に至る膨脹筒形構造（奥幅320cm、奥行400cm、羨門幅89cm）。羨道と玄室との区別がない形。奥壁はアーチ形の平面をなし、流入土上からの高さ261cm。羨門部高さ流入土上から115cm（昭和7年測図のとき流入土の深さが測っていない）。奥壁中央に矩形のきりこみがあり、その奥にそれを入口とした棺室がもうけられている。棺室入口（流入土上60cmに下辺があり、高さ97cm、上辺83cm。入口の形は下辺がやや大きい台形だが、右边が大きく崩されている）は左右上の外縁には幅7cmの枠とりがある。棺室羨道は奥行34cm。その内に矩形平面（幅210cm、奥行165cm）の棺室がある。棺室は断面アーチ形（高181cm）の横長の筒形である。棺室床は大きく堀り崩され（昭和7年測図当時既に若干崩されていたが、昭和29年再調査のときには深さ30cm、棺室床の大部分が棺室羨門部から右前壁にわたってきり崩されていた）ていた。棺室右壁には上部に竪穴家をあらわすような三角形、右方には数本の縦筋と楯かと思われるものが刻まれており、上部には□仏と漢字も刻まれていた。漢字は後世のものであろうが、竪穴家や楯とみられるものは当初からのものであるかわからない。主軸南々西。

右横穴

中横穴と同形である。奥で幅と高さが最大、前方に次第に幅と高さを減ずる断面アーチ形の膨脹筒形である。奥幅280cm、奥行279cm、羨門幅133cm。羨門部がかなり切りとられているらしいが、羨道と玄室との区別のない形と考えられる。昭和7年測図時、流入土の深さを測っていないが流入土上からの奥壁高195cm。奥壁中央に方形の入口を開いて、その奥に横長矩形の棺室がある。棺室羨門部の周は左右上の三方に幅15cmの枠とりをしてある。棺室羨道長59cm。羨道中間には幅21cmの溝が床から側壁にかけて作られている。（棺室は板石で閉塞されたと考えられる）棺室は幅215cm、奥行170cm、断面アーチ形の筒形であり、高さ155cm。玄室奥壁上部に1字と左壁にたてに4字の梵字のような刻字があるが判読できない。当時のものか後世のものかも判断できない。主軸南南東。

まとめ

3穴ともアーチ形断面の膨脹筒形構造をもつ横穴であり、中及び右のものは奥壁に棺室をもうけているが、様式的に同時期のものであり、3穴とも羨道と玄室の区別を失なった最末期型であり、8世紀後半に属すると考える。

新宿海岸横穴

位 置

逗子市新宿5丁目1880野中厚氏方の東方30m。高養寺と自動車専用道料金所との中間、切りたった崖面にあり、下から3mのところ開口する。自動車専用道工事によって開口したものか、以前からあったものか不明。

横穴状況

奥幅(335cm)にくらべて前幅(250cm)が少し狭いから台形の平面である。四壁は直立し(高188cm)、壁の上が彎曲して天井に移行する形態である。天井は大きく崩壊しているが、わずかな彎曲面をもつ平らな天井(陸形天井)であったらしい。床の周に排水溝がある。前壁中央に羨道(玄門幅112cm、羨道長85cm)があるが、前面がきりとられ、天井部分は崩壊している。内部の流入土は全部かきだされており、その後崩壊した岩が羨道から玄室中央辺までを埋めている。内部に大礫2・小礫2が残り、羨道外にも大礫1を認めた。主軸方向南々西。

ま と め

この形態からはかなり古い時期の横穴と考えられるが、流入土のすべてがかきだされているから、はたして横穴か否かは確認できない。大小礫の残留物からもそれが横穴床の敷石とみられる。発掘されたことを伝えている者はいないが、自動車専用道工事のとき開口し、内部がほられてしまったものであろう。尚この上方かなり高い位置にもう一穴ある由だが確認できない。

小 坪 の 大 塚

出土品の存在

昭和7年12月逗子小学校長荒井友三郎先生（故人）から披露山の大塚から出た鏡を小坪5213の勝島琴吉氏が持っていると知らされ、勝島氏を訪問して見せてもらった。桐箱に納められた和鏡2面と硯2面であった。桐箱蓋には「三所物」と墨所され、蓋内面には次の如き墨書があった。

「石硯貳個

古鏡貳個

明治廿年三月廿六日所有地三浦郡小坪村第八百八拾壱番地字こしまき山林壱町八段五畝五歩之内里謄大塚松木壱本渋沢喜作氏之請求ニ応ジ掘出之際松根ヨリ顯出ス勝島忠七」

再 調

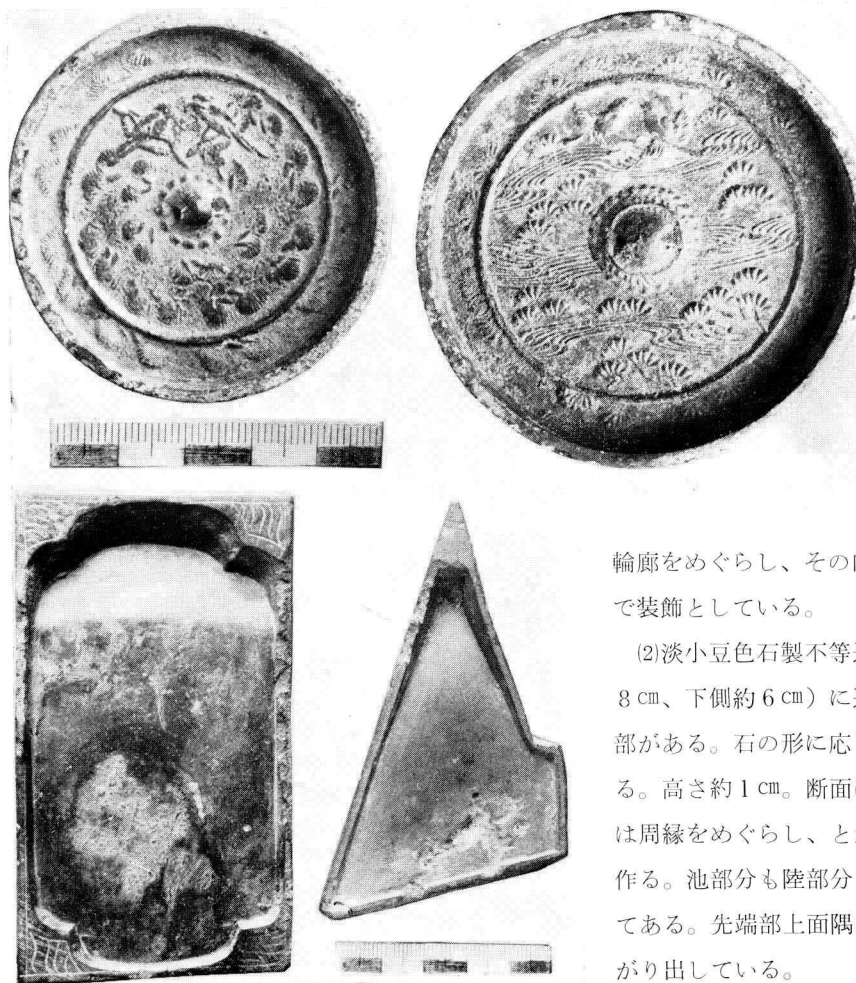
昭和47年1月再び勝島氏を訪問し出土品の拓本をとり、撮影をしたがこのとき細かにメモをとった。琴吉氏は逝去し、現主は勝島一雄氏（小坪4－9）になっていた。

和鏡 (1)菊座鈕、小松流水文双雀鏡。細線の単圈をめぐらし、縁は直角式中縁、高さ7.5ミリ。直径68ミリ。わずかに反がある。鎌倉後期。

(2)菊座鈕、小松散文双雀鏡。細線の単圈をめぐらし、縁は直角式中縁。高さ4.5ミリ。直径58ミリ。わずかに反がある。鎌倉後期。



小坪大塚わきに立つ安田藤吉氏（鳴原馨氏撮影）



小坪大塚出土品

硯 (1)黒灰色石製
矩形(6.25×11cm)
高さ1.2cm。断面は
上面より下面が小さ
くなる。池部分も陸
部分も側壁は垂直で
なく、内面に斜に切
ってある。上面周縁
の四隅は内にとがり
出している。四隅に
は細い沈線をもって
周縁幅と同じほどの

輪廓をめぐらし、その内に数本の波状文を刻ん
で装飾としている。

(2)淡小豆色石製不等辺三角形(左側10cm右側
8cm、下側約6cm)に近いが、右辺に一部突起
部がある。石の形に応じて作ったものと思われ
る。高さ約1cm。断面は下に狭くなる。上面に
は周縁をめぐらし、とがった部分に小さい池を
作る。池部分も陸部分も側壁は内面に斜に切っ
てある。先端部上面隅は(1)と同じように内へと
がり出している。

この様に断面が下に狭くなること、池などの

側壁が内面に斜にきってあることなどの手法は鎌倉市内でいくつか発見されたことのある鎌倉期鏡と同
手法であるから、これら2例の伴出硯を鏡と同じく鎌倉期のものとすることができる。

まとめ

昭和7年調査当時、友人鳴原馨氏が小坪の安田藤吉氏の案内で大塚を見、全形を撮影してくれた。そ
のときの話によると伊勢山から披露山へ通ずる山路の北側に大塚があって、頂上が二間四方ほど平らに
なっていたという。塚のすそに地藏の碑がたっていたという。その後みにいったが路にそった北側に小
高い部分があり雑木がしげっていた。地藏はみあたらなかった。

今地図でみると大崎の基部に諏訪神社があり、その東方に「塚の越」という小字があり、路をへだて
て小字「こしまき向原」がある。「こしまき向原」の東南部「塚の越」の北東部にやや小高い塚状部と
その南裾に寺のマークがある。小高い部分が大塚位置であると推定される。先年来行なわれた披露山団

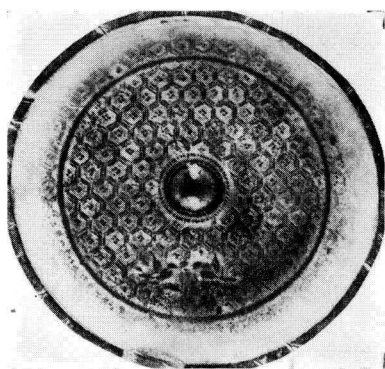
地工事でこのあたり一帯が削平されているときき、みにいったが既に削平されたあとだった。この地にあった地藏像が移されたのが披露山公園のぼり口の地藏堂内の石像であるという。

小坪大塚は位置や出土品から考えて経塚と判断されるが、鏡や硯の出土状況が全く知られていない。ほかの経塚例からすれば、経巻を納めた常滑焼などの壺の蓋として和鏡が用いられ、又は壺にそえて埋められることが多い。写経に使われた硯がいっしょに埋納されている場合があるから、これらの硯はそれであろう。硯の一つに鉄錆の付着がみられるから、ひどく腐蝕した小刀がいっしょに納められていたと思われる。壺や小刀は松根堀りのとき砕いてしまったので採取しなかったものであろう。再発掘する機会があったら、それらが確かめられたと思うが、今となっては明らかにすることができない。

森の上出土和鏡

赤星ノート昭和3年10月頃に「新宿披露山経塚出土鏡」と記した和鏡拓本が一枚貼ってある。「出土状態 披露山（浪切不動付近の山上、字森の上）の松の根本より発掘、他に硯が二つあったという」との意味の付記があるが、誰の所蔵品を借りて拓本をとったか記してない。「松の根本より発掘」「ほかに硯が二つあった」というのは小坪大塚の話と混同されているらしい。ノート昭和7年12月4日条に「新宿の鏡所有者は田中正五郎氏」と記してあるのがこの記事の鏡らしいが、田中正五郎氏住所は記してない。字森の上は披露山公園の南方尾根辺の小字である。この辺の尾根に経塚があって、たまたま松の根堀をしたとき出たというのではないだろうか。

拓本でみると鏡の断面図に細かい寸法が記してある。径10.6cm。中縁が少し外開きに立ち上る。背径11.7cm。菊座鈕。圏は中線単圏。3重線でかこった亀甲の中に4つ点をもつ亀甲つなぎを地文とし、双雀が配してあるもの。鎌倉期。菊座鈕亀甲地双雀鏡。



字森の上出土和鏡

まんだらどうやぐら群

鎌倉の丘陵は凝灰岩又は泥岩からなる。その山腹を垂直にきり、これに縦長矩形の羨門をきりこんでから左右にひろげ、やぐらを造営したもの。

一般的形態は方形又は矩形の平面であり、側壁と天井は平らであり、前壁中央に短かい羨道がある。玄門部左右天井と床に柱穴があり、ここに門扉があったことを物語る。一般に奥壁又は左右壁にそって低い壇を作り、この上に納骨穴を作る。壇上に供養塔（五輪塔・宝篋印塔）をならべる。又壁に大小の小室（^{がん}龕とよぶ）を作り、この中に納骨し供養塔をならべるものもある。

所在地

逗子市小坪7丁目（小字まんだらどう）、小山半次郎氏所有地

地形とやぐらの分布

鎌倉の三方をとりまく丘陵の中、東側丘陵として太平山（標高150m）から南へ延々6kmにわたってつづき、その南端が逗子と鎌倉との境で60m～70mの丘陵となって海に達する。この丘陵南端から1.5kmほど北によった部分に東西両方から深く谷が入りこんだところ（現在国鉄名越トンネルのある部分）があり、この部の尾根に名越切通が位置する。今はナゴエと呼んでいるが、古くはナゴシと呼んでいたのだから「難越」の地であったかわかる。ナゴシの古道を通りやすく開くことは鎌倉として自然地形



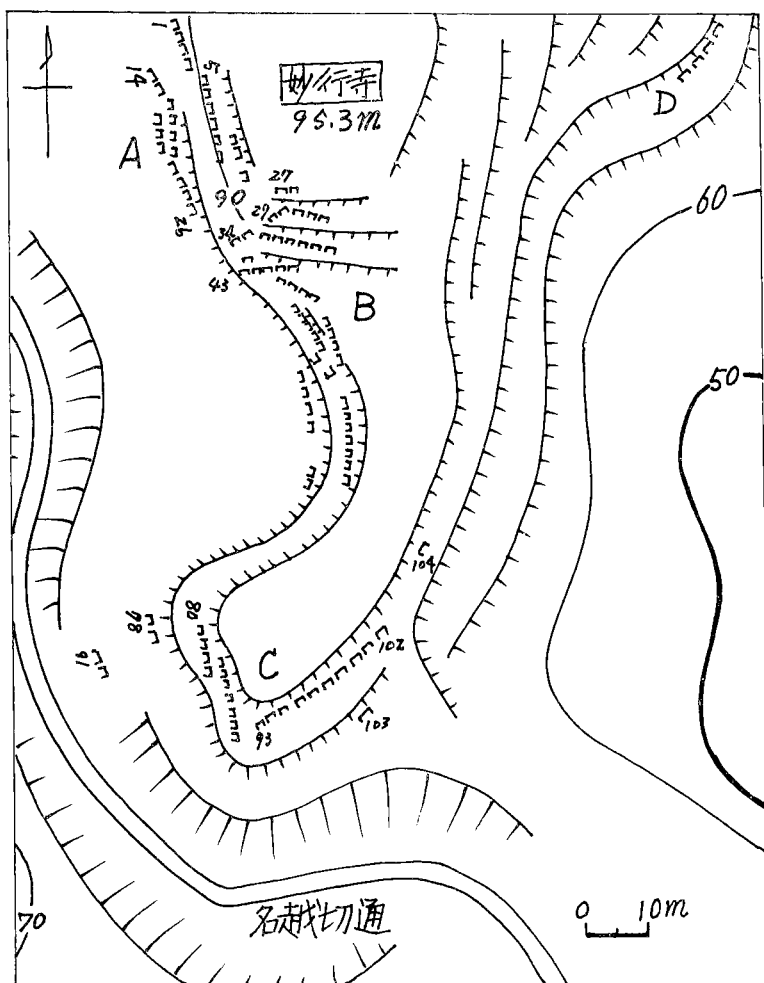
まんだらどうやぐら B群

にたよった当時としては防禦の点で弱体化することであったから、名越切通を作ると同時に厳重な防禦施設として、三浦側山腹を延々800mにわたって高い切岸の連続地にし、切通の北側に防禦の中心拠点が作られた。本やぐら群は111穴からなりこの防禦の中心拠点に位置する。大部分が小坪7丁目（小字まんだらどう—A群B群C群）にあり、一部（D群）が大字久木側にある。妙行寺西側山腹のものをA群（26穴・1号～26号）、南山腹のものをB群（51穴・27号～77号）、東山腹のものをD群（7穴・105号～111号）、切通北側尾根のものをC群（27穴・78号～104号）とする。

調査経過

戦前鎌倉史跡めぐり会（主催者嗣ヶ谷住亀田輝時氏・故人）が踏査した昭和8年5月、同行して存在を知った。当時は山中のやぐら群として見学した。昭和23年3月地主小山半次郎さんの了解を得て北端部分の一群を実測した。そのころ西前面一帯の平地は畑地であり、地主は付近のやぐらをつつ堀り出し、土を除き五輪塔など散乱しているのを積みならべていた。今墓地公園になっている部分（小山氏が市に寄贈したもの）からも数個のやぐらが発見され、五輪塔・板碑が出されたがこのとき多数の礫が出土したことをきいた。その後ここから採集したという漢字墨書のある礫を見せられ、それが写経石であることを知って現地を訪れたが散乱している多数の礫は雨にうたれ、すべて文字が消えていた。

昭和35年2月台座に銘文のある大きい宝篋印塔が出たと知らされ調査した。昭



まんだらどうやぐら群分布図

和46年1月名越切通につづく北方尾根を切通防衛の陣地として調査したとき、付近のやぐら全部の記録をした。この調査には塚田明治・小暮慶明両君の援助をうけた。

調査記録

番 号	間 口	奥 行	高	羨道長	記 事
A-1 群 4 穴、西向					
1	240cm	240cm	142cm	80cm	奥壁に接して奥行65cm高16cmの壇がある
2	370	400	185		奥に奥行 100cm 高30cmの壇がある。奥壁上部に幅34cm高50cm奥行50cmの龕があり、その奥に奥行20cm高20cmの壇がある
3	240	240	245	60	
4	300	300		60	左右奥の三方に低壇があり、五輪塔ならぶ。右壁奥に間口 220cm 高42cm奥行38cmの長い龕があり、龕内に写経石と思われる小礫が若干みられるが文字は残っていない
A-2 群 A-1 群の南に接し、やや高い位置に 6 穴ならぶ。西向。					
5	132	128	110		床面の大部分がほりくずされている。よせあつめ五輪塔一基
6	290	350	165		奥と右に低壇（高15cm）がある。右壁奥に間口 150cm、高 120 cm、奥行60cmの龕がある。
7	185	250	170		前穴の右前を本穴の左奥がきり合っている。右側前壁がない。
8 9	280				前半がきりとられている。右隣に間口240cmの別のやぐらの奥半とみえるものがつづく。右壁に作られた大龕ともみられるが不詳
10	430	290		200	左右奥の三方に低壇（高15cm）がある。内部に多くの五輪塔がある。凝灰岩製（鎌倉期）が多い。安山岩製のものは室町期。凝灰岩製層塔の塔身があり、四方に蓮座上に安住する仏をあらわす梵字があるが風化がひどい。上面に方20cmばかり深18cmの四角い穴がある。納経されたところ。屋蓋が1個残っている。

11	110	100			前壁がきりとられている。安山岩製五輪塔2基。よせ集め。空風輪は鎌倉期と南北朝期、水輪は室町中期
12					前穴の右前ときりあっている上、前部をもきりとられている。
13	175	95		90	右前がきりとられている。
A-4群 A-1群の右下、A-2の下方に位置し一列にならぶ13穴。西向乃至西北向					
14	230	180	145		左前壁なし。南向
15					埋もれている。
16	335	320	145		奥壁に2個の龕がある。17号ときりあって右壁の前半を失う
17	270				16号ときりあって左壁を失なう。前半をきりとられる。
18	220	230	118	80	左前がきりとられている。左右奥の三方に低壇（高25cm）がある。凝灰岩製五輪塔9基がある。
19	230	340			右半崩壊。凝灰岩製の地輪1個
20	335	239			17号穴の前方にある。奥壁中央上部に幅20cm高30cm奥行15cmの龕がある。凝灰岩製と安山岩製の五輪塔多数
21	100	50			20号穴羨門外右側。龕ともみられる小形。五輪塔断石がある。写経石とみられる礫が多数あるが文字は残っていない
22	350	148			19号穴の下、かなり変形したやぐらである。五輪塔多数。安山岩製のは室町中期。
23	360	740		200	大きく複雑なやぐら。羨道をふくむ前壁が崩れている。左壁に2、奥壁に2、右壁に4の大きい龕がある。奥の龕には低壇がある。
24	310	320	160	90	天井が崩れている。
25	230				24号の羨門外にある。左壁も前壁もきりとられている。
26	140				前壁がきりとられている。

B区 西南向の山腹であったA区の右につづくもの。妙行寺のある山頂部の南側山腹に4段に配列する。最下段は低くなった尾根の西斜面につづいている。計51穴。五輪塔の大部分が外に出されてならべられている。凝灰岩製が多い。

B-1 群 最高部の2穴。前がきられている。南西向				
27	120	320		はっきり形がつかめない。左壁に奥行150cmの小室と、奥壁に奥行110cmの小室をつけた形としておく。右壁はきりとられた？
28	220	200		
B-2 群 第2段目。5穴。左の2穴は前がきりとられている。南西向				
29	255	260	140	右前壁がきられてとなりにつづく。
30	195	225	115	両穴からだされた五輪塔が前にならべてある。凝灰岩製は鎌倉期。安山岩製のものは南北朝期から室町期にかけてのもの
31	210	195		40 前2穴と後3穴は主軸方向がちがう。南々西向となる。左前壁はきられているが右前壁は残っている。
32	195	150		105 穴の前に五輪塔がならべられている。31穴～33穴にあったものであろう。
33	185	160		50
B-3 群 第3段目。左2穴は南々東向、以下の7穴は南々西向				
34	240	160		左壁前半から右前壁にかけてきりとられている。左右奥の一方に低壇（高20cm）がある。
35	300	300		30 右前壁が失われている。
36	275	260	120	65 奥に低壇（高7cm）があり5基の五輪塔と断石がのっている。
37	130	140		120 右壁前方から前壁にかけて崩れている。
38	195	215	135	30
39	195	195		45 左側に低壇がある 奥にもあったらしいがきりとられている。

40	225	365		100	三方に低壇（高25cm）がある。奥の壇の上に更に低壇があり、五輪塔 5 基がある。
41	245	210		75	右前壁がない。天井崩壊。羨道に五輪塔 2 基
42	200	160		85	天井崩壊
B-4 群 最下段。左方の10穴と中央の 9 穴は大体南西向。右方のものは西々北向					
43	170	100			左壁から左前壁にかけて失なわれている。南東向
44	150	150			前壁を失なう。左壁奥に間口85cm奥行15cmの龕がある。
45	130	185	120		前壁を失なう。奥に低壇（高15cm）がある。
46	110	135			前壁を失なう。
47	175	180		40	南々東向
48	295	285	135	80	左右奥の三方に低壇（高20cm）がある。
49	145	155		60	五輪塔断石がある。安山岩製のものは室町中期
50	290	325		50	前壁を失なう。奥壁上部に龕がある。
51	380				前壁を失なう。右側に五輪塔がある。安山岩製。南北朝期・室町初期・室町中期
52		300			52号53号がぎりあって境の壁を失なう。左壁に間口の広い龕が2個
53		300		30	左壁なし。左奥崩壊
54	215	215			右前壁なし
55	155				左前壁から右壁にかけてきりとられている。
56	170	165			右前壁なし。奥に低壇（高25cm）、壇上に凝灰岩製五輪塔 4 基、鎌倉期
57	135	155	120		58号の奥壁ときりあって前部を失なう。
58					大部分がきりとられ、右奥を残す。
59					大部分きりとられ奥壁だけを残す。

60	100	85			前半をきりとられる
61	95	110			前半をきりとられる。
62	120	170			前半をきりとられる。
63	135	65		25	右前壁を失う。北西向
64	110				右壁前方から左壁にかけてきりとられる。北西向。
65					きりとられて奥壁右端と左壁奥を残す。北西向。
66					左壁から右前にかけてきられている。奥壁に龕がある
67					きられてわずかに残る
68					きられてわずかに残る。
69	120	90		20	右前壁と右壁を失う。西向
70	140	140	110	70	左右奥の三方に低壇（高10cm）がある。北西向
71	130				奥が崩れている。前壁を失っている。間口に対し奥行がひどく深い（3 m以上）。西々北向
72	135	150			前壁を失なう。
73					前壁を失なう。左壁奥に龕がある。
74	140	145			右と奥に低壇がある。前壁を失なう。
75	125	245			前壁を失なう。右壁奥に龕がある。
76					左前から右奥にかけてきりとられている。奥と右に低壇があったらしい。
77	170				前半をきりとられている。
C区 妙行寺のある山頂部の南下、B—4区右端から更に南西にのびる低い尾根の先が小山状に高くなり幅も広くなる。この高くなった尾根の西側から南西をめぐり、東南側にかけて2段に配列する27穴。					
C—1群 2穴。北西向					
78	120	110			前面をきりとられてる。
79	160	140			前面をきりとられてる。

C-2 群 4 穴。C-1 群の右にならぶ					
80					前をきりとられ奥だけ残る。南々西向
81	340	405	156		左壁前から右壁にかけてきられている。 南々西向
82	290	225	135		前半をきりとられている。
83					奥壁左から右壁にかけてきりとらている。奥に低壇（高30cm）。凝灰岩製五輪塔断石がある。鎌倉期
C-3 群 7 穴。82号の上方に84号があり右にならぶ					
84					埋もれている。
85	305	320	145	25	奥に低壇がある。奥壁右に龕がある。西々南向。
86	430	430		30	右壁前半きりとられている。内部埋もれる。南々西向
87	200	200	115		前壁きられている。左右奥の三方に低壇（高15cm）。奥壇に更に低壇（高10cm）がある。南西向
88	227	295	175		左右奥の三方に低壇（高35cm）があり、奥壇中央に径30cmの納骨穴、右壇中央に径25cmの納骨穴がある。左前壁を失なう。羨門で低壇状に高く（30cm）になっている。
89	310	300			前壁がある。南西向
90					物置になっている。
C-4 区 民家の西方の崖にある。83号の前方になる。2 穴					
91	180	175	115		左右奥の三方に低壇がある。前壁を失なう。
92	240	223			左右壁を失なう。埋もれている。
C-5 区 尾根先端部から東南に配列する11穴					
93	180	190	120	28	三方に低壇（高25cm）がある。羨門外に前庭部がある。南々東向
94	180		95		前半をきりとられている。南東向

95					左壁から奥壁にかけてきりとられている。南東々向。
96	200				左壁から右壁にかけてきりとられている。南々東向。
97	215				前半をきりとられている。南々東向。
98	265		130		前壁をきりとられている。南東向。
99	235	260	145	60	奥に低壇（高10cm）があり、壇中央に径27cmの納骨穴がある。左壁前方がきりとられている。
100	265	270	157	100	三方に低壇（高12cm）がある。南東向。
101	340	290	150		左前壁を失なう。南東向。
102	250	300	145		前壁を失なう。
103	190	135	125	20	右方にずっとはなれ、小山状部の東側に1穴あるもの。左前壁を失なっている。
C--6区 98号穴の前方、一段低くなった崖にある。					
104	300	275			前をきられている。左壁に龕があり、奥壁左に更にほりこんでいる。奥壁左より台座上に座する地藏像が厚肉彫されていたものがきり崩され、光背だけが残っている。蓮弁が風化しながら残る。南東向。

D区 妙行寺のある山頂部の東山腹にある4穴とその北方、法性寺墓地西側崖の3穴をD区とする。A・B・C区は小坪7丁目にあるがD区は字久木にある。D-1区の4穴はお猿畑やぐら1～4号穴として前号に記した。D区はやぐら群は一応小坪やぐら群から区別する。

考 察

名称 これらのやぐら群に対する伝承も、よび名も存在しない。小字の「まんだらどう」は「曼陀羅堂」の意であり、そのような名でよばれた堂があったことを伝えるものであろう。堂所在の位置はわからない。江戸時代には今のような地番がないから、畑とか平地とか谷などにそれぞれよび名があった。そのよび名はその土地の歴史を伝えるものが多く、極めて重要な参考資料であったが、明治になって地番が使われるようになってから、大部分が忘れられた。小字「まんだらどう」の中にあった、それらの小名が現存していたら、まんだらどうの位置やその他のこともわかったと思うが、今となってはもう何もわからない。やぐら群のある山腹にとりまかれた妙行寺の西側か南側の畑かに、そのような名でよばれた堂があったのであろう。しかしそれは江戸時代末にはもうなかったらしく、新編相模国風土記稿に

は何も記されていない。今「やぐら」とよばれるこれら多くの墳墓窟とまんだらどうとは関係がありそうである。これらの墳墓群は鎌倉後期には鎌倉有数の群集墓地として、墳墓に対する供養の殿堂といったものが存在し、それに対して何かのよび名があったにちがいない。規模はわからぬが何人かの僧が常住する堂があって、墓参りの人達の依頼をうけて読経したと考えてよいのではあるまいか。その堂が曼陀羅堂とよばれたことの名残が小字名となったと考えてよいのではあるまいか。

年代 100余穴からなるこれら墳墓穴の中には後世の破壊と思われる前半部の破壊が目立つ。破壊されずに残っているやぐらは方形又は矩形の玄室と前壁に作られた羨道とからなっている。鎌倉に残る多くのやぐら例から考えて、このような構造のものは鎌倉期のものである。室町期になると前壁がなくなり、且つ小形化し、埋葬後前面に切石を積みあげて閉じてしまうようである。

内部には供養塔である石造の五輪塔や宝篋印塔が奉獻されたままに残っているのが普通である。惜しくもこれらやぐらに奉獻された供養塔は大部分がやぐら前にだされて行儀よくならべられている。それらがどの穴にあったか今となってはわからないが、戦前及び戦争直後訪れて実見したところにはやぐらの中にはとところ狭しと五輪塔が納められていた。供養塔の大部分は地山と同質の凝灰岩製である。わずかに安山岩製のものもあった。前者はその形態から鎌倉期のものであり、後者は南北朝期から室町中期にかけてのものであったが、むしろ室町中期のものが多かった。即ち前者はやぐら群が墳墓として作られ、供養されていた鎌倉後期のものであり、後者はその後の供養碑である。室町期の供養塔があるのは子孫がまだ室町期にいたっても供養をつづけていたことを物語るものであり、室町期になってもまだ埋葬がつづけられていたかも知らないのである。

即ち本やぐら群は形態からみて鎌倉後期には既に存在していたことが明らかであり、供養塔中に室町期のものもあることから、室町期まで子孫によって供養がつづけられていたものもあることは明らかである。あるいはそのころまだいくらかの埋葬がつづけられていたかも知らない。

防衛陣地との関係 名越切通が鎌倉防衛上の重要地点の一つであったことは、名越切通を中心とする周辺一帯が城郭構造になっていることで明らかである（注）特に切通の北側尾根は嚴重な構造になっているが、今妙行寺のある尾根の高処北東側には幾重にも抵抗陣地のあとを残し、中心拠点であったことが察せられる。この拠点は切岸でとりまかれているが、東側切岸にD群やぐらがあり、西側にはA群やぐら、南側にはB群やぐらがある。防衛施設としての切岸に2次的にやぐら群が作られたものであろうが、当初から切岸にやぐらがあったとしても防衛には全くさしつかえはないから、早くから墳墓群の地になっていたかも知らない。このような嚴重きわまる防衛陣地を必要としたのは北条氏にとって最強敵視された三浦氏が切通の外側に播居していたからであるが、三浦一族が鎌倉内部において滅された宝治元年（1247年）以後は事実上名越切通路防衛陣地は不要物になった。城郭施設としての切岸はやぐらを作るに都合のよいところとして、それ以後においてやぐら群が作られたと考えてもいい。どちらにしても鎌倉時代後期にはここに100基余のやぐら群が存在したことは事実なのである。

価値 先祖が生活のあとに残した生活の歴史を物語る資料が遺跡である。遺跡と語って遺跡が語ろうとすることを理解できない者が、遺跡が保存してきた現状を動かしてしまった場合、それによって語る

れることは動かされただけ減ずるもの。したがって若干でも後人の手が加わった遺跡はそれだけ遺跡が本来もっていた事実を物語るができなくなっているものである。

このような遺跡というもののもつ性格からみて、本遺跡は過去にあった姿そのままを自然に埋没しているものではなく、流入土がかきだされ、きれいに掃除された上、内部にごろごろしていた塔婆の大部分が外にだされ、きちんと積まれて、見た目にはきれいに整頓され、史跡公園をみるが如き姿になっている。このことは内部にどのようにどんな塔婆がおかれていたかの問題に対する解答が全くできなくなってしまったことであり、竈内部にある塔婆と埋骨との関係をみるのが全くできなくなっていることでもある。勿論内部の納骨穴と塔婆との関係はわからなくなっている。

雨風に弱い凝灰岩製塔婆が雨風にさらされほうだいの姿になって外にだされている。塔婆の積み方もよい加減である。かくて残されたものは供養塔婆と無関係にされたやぐらそのものの空きよな姿であり、やぐらときりはなされた供養塔の雨ざらしの姿である。本遺跡としての価値はやぐらがどのようにならんで群在しているかということだけである。名越切通という城砦の防衛陣地の重要な拠点に位置するやぐら群の存在ということだけである。

しからばこれを記録するとして必要なことは群在している事実と各個の現状や大きさぐらいなものであり、それに加えて名越切通防衛陣地にあるやぐらが物語る防衛陣地との関係くらいなものである。現状に対して将来調査研究できるものとしては「埋骨状況」が残るだけであるが供養塔婆ときりはなされた埋骨に対する調査はつまらないことである。

ま と め

本やぐら群が鎌倉後期に既に存在したことはやぐらの形態と供養塔の形式から明らかである。この地が名越切通という重要な防衛陣地内にあることから、名越切通防衛陣地完成後に墳墓群として作られたものであることも明らかである。しかし、防衛施設としての切岸にやぐらが営まれたとしても防衛施設として効力を弱めるものではないから、防衛陣地として重要視されていた時期に、既に作られたと考えることもできるし、北条氏が最強敵視した三浦氏を滅亡させたため、防衛陣地としての重要性が減ってしまった後に墳墓地となったと考えることもできる。何れにしても鎌倉後期にはこのやぐら群は存在したのである。

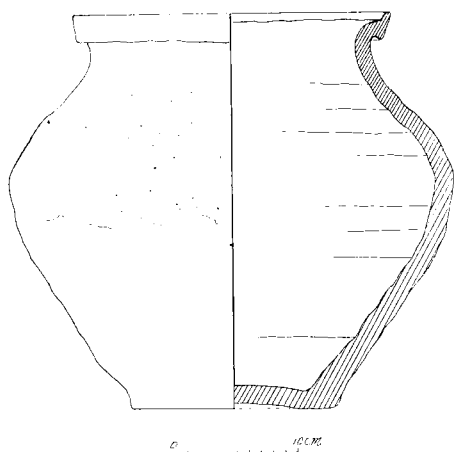
中心陣地として現妙行寺南側と西側及び東側の山腹に多くが群在することは、やぐら造営に必要な山腹の切断面が切岸として存在していたからであり、切通北側に位置する防衛陣地の周辺に111基が作られ、鎌倉としても有数なやぐら群所在地であったはずである。「まんだらどう」の小字名は恐らくこれらやぐら群と密接な関係にあった建物の名であったであろう。ともあれ、本やぐら群が鎌倉としても有数の墳墓穴の群在地であることは動かせない事実である。

(註) 赤星直忠「名越切通」逗子市文化財調査報告第3集、逗子教育委員会、昭和47年3月刊

付 記

宝篋印塔

小山白哲（半次郎）老の妙行寺境内にある。やぐらからでたものだという。安山岩製。昭和35年2月調査のときには蓮座と相輪がなかったが、現在ではそろっている。蓮座は室町初期の型。基台幅と蓮座上面受座幅とがあわない。基台幅と塔身は大体あっている。塔身四方には金剛界四仏の梵字を刻む。笠



幅は基台幅よりやや大きい。笠の露盤と相輪の伏鉢径とは大体合っている。一見そろっているかに見えるが寄せ集めである。基台の一側面に刻銘がある。

右志趣者「為」恵門禪門「（右区劃内）」

三十二年「（中央の束）」

造立之所「嘉慶二」三月十九日「（左区劃内）」

この塔はよせあつめだが各部分は刻銘の時期と大差ない。蓮座だけは少し新しい。

常滑焼蔵骨壺

逗子市教育委員会に小山半次郎氏が寄贈されたもの。まんだらどうやぐら群の一つからでた壺の一つである。

暗赤褐色の常滑焼である。胴上部が張りだしぎみに張っており、太く短い頸が外彎し、大きい口になる。口縁が折返えしになっており、口縁内縁に折返えしの上部が突出した形になっている。底はあげ底ぎみ。高さ32.2cm、胴径36.2cm、口径26.1cm。形態は鎌倉後期のものであり、やぐら群の作られた時期のものである。

小坪高崎邸内やぐら

所 在

逗子市小坪4-16-2、不老閣、高崎実氏邸内東側崖に1穴だけある。もと内部に五輪塔20基ほどあったのを裏山の塚わきに移したというが、今はすべて失なわれているから、それが鎌倉期のものか室町期のものかわからない。やぐら前方の池畔に緑泥片岩製板碑（永仁三年銘）があるが、もともと邸内にあったというから、このやぐらからでたものと考えてよいのではあるまいか。

やぐら

泥岩の崖は南西向。戦時中防空壕として使われたとき、人口が若干きりひろげられている。方形平面・垂直壁・平天井とやぐら特有の姿を備えているが、四壁上部から天井への移行部が曲面になっているのが一般やぐらとの相違点である。幅390cm、奥行左側372cm、右側325cm。高185cm。壁下に排水溝をめぐらしているが、現在、右壁中央前に幅80cm、奥行175cmの矩形水溜ができており、排水溝の水はこの中にためられるようになっている。床面に納骨穴の存否不詳。

正覚寺裏やぐら

所 在

逗子市小坪5丁目2、松井鶴松氏裏

説 明

正覚寺背後民家群中、松井鶴松さん背後の山腹に2基のやぐらがあるがともに前部が崩れて大きく開口している。早くから開口しており、物置に使われていたので風化がひどく、細部はわからなくなっているが、やぐらであることは間違いない。

第1号（左） 幅5m、奥行4m。天井も前壁も崩壊している。左奥に戦時中防空壕ととしてあった部分がある。

第2号（右） 約5mはなれている。幅4m、奥行4m。高さ約2m。前壁崩壊。

住吉やぐら群

所 在

逗子市小坪5丁目13。正覚寺背後、住吉神社西の民家の間をのぼってゆくと住吉城跡山腹をくぐりぬけるトンネルがある。トンネルの少し手前、松井鶴松さんわきをS字形にのぼり、トンネルへ真すぐに

むかう路を左に折れるとすぐ右側に3段に分布する8穴のやぐら群があった。この路は山腹を山にのぼる路だった(赤星ノート昭和9年1月)。今、このあたりは民家がたちならんでいて、やぐらがどのあたりであったかわからないので存否不詳。

やぐらの記録

やぐらは路のすぐ上に3穴(右から1号～3号)、その上に2穴(4号、5号)、更にその上に3穴(6号～8号)ある。やぐらの一つ一つについての図がないので、どの穴か覚えていないが羨道や前壁がなく、前壁のあるべき部分に切石が積まれているのがあった。前壁がなく、このように切石を積む形は室町期のやぐらに普通である。ノートには次の註記がある。

1号やぐら 五輪塔・宝篋印塔・板碑断欠・骨甕断欠・かわらけ・礫(写径石)

5号やぐら 五輪塔多数

参 考

戦前廃刊になった雑誌「鎌倉」(亀田輝時氏発行)にのせられた史跡めぐり会記録中に次の記事がある。「昭和9年3月18日……松井氏に案内され……付近には沢山矢倉があるとて後山山腹のものを案内される、夏季テント村を開く山腹の平地に面したところに開口した数個と尚理もれた数個の矢倉がある。開口した分に入ってみる。松井氏のもってきた梯子に亀田氏と共によちのぼる。宝篋印塔や五輪塔の破壊されたものに混じて板碑破片もある。礫やかわらけもある、……毎年一ヵ月以上もテント村を開いて自由に出入できる所……更に上方の矢倉に……凝灰岩製五輪塔が充満している。」

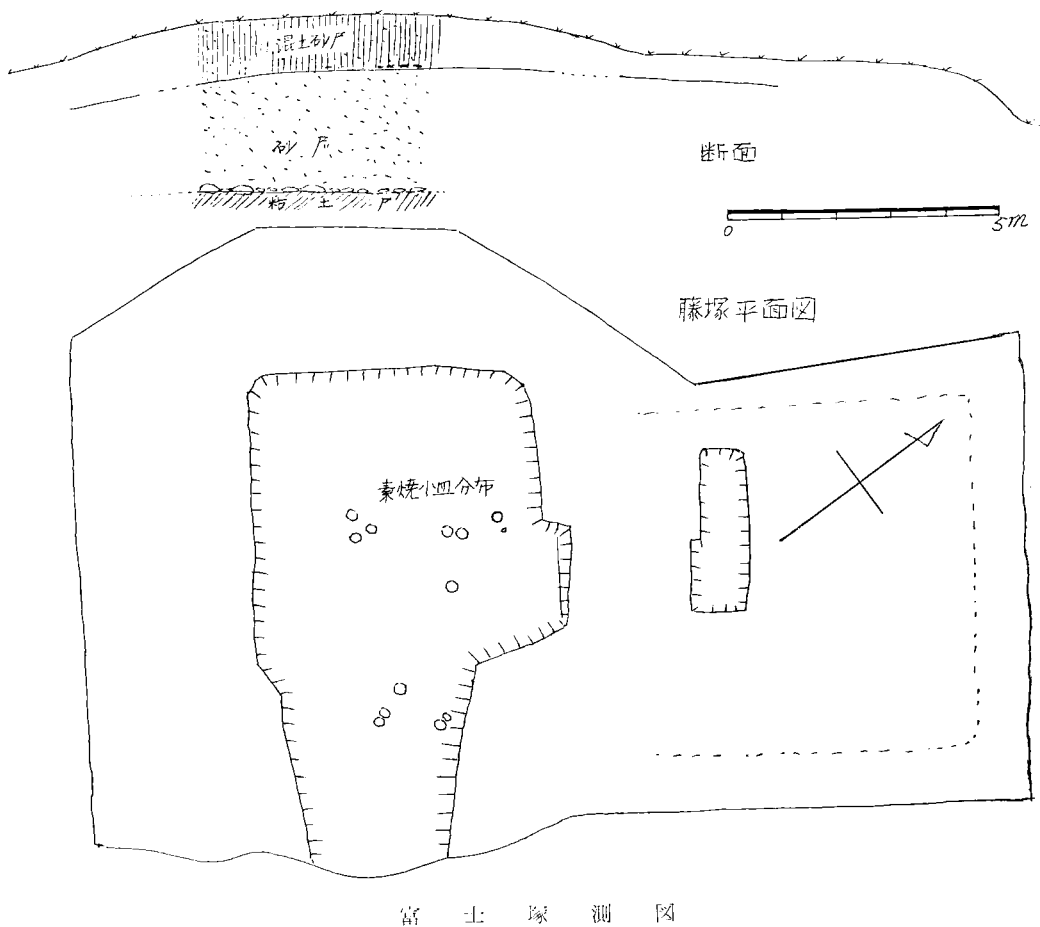
新宿の富士塚

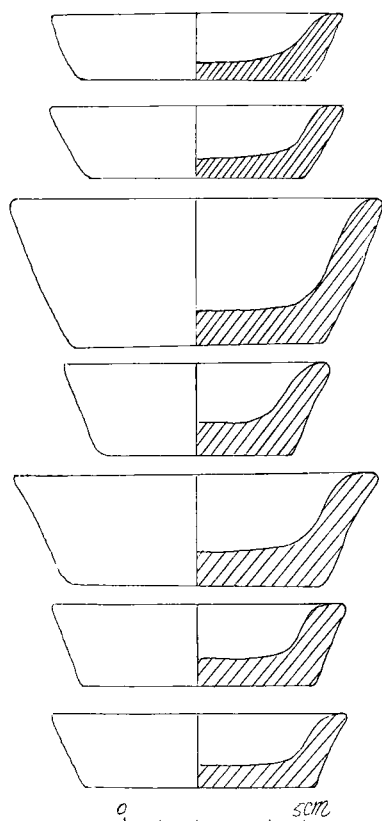
序

本記録は富士塚発掘の直接担当者であった赤星の記録「逗子町將軍塚（藤塚）資料」によって記した。戦時中他の記録とともに防空壕中に保管されたため、湿気によって写真全部が変色して全くみえなくなったので、当時撮影を担当した逗子小学校の嶋原馨先生が原版を保管していればよいがとたずねてみたが既にわからなくなっていた。筆者も参考として撮影したことが記録中から判断されるが、探しだせない。（手札形乾板はすべて防空壕中で湿気のため、互に接着してはがれなくなってしまったし、フィルムも変色してしまった。フィルムは変色しても何とかわかるはずだが見つけだせなかった。）

富士塚の所在と現状

所在と伝承 「將軍塚」とよばれるものは新宿小字富士塚2170番（75坪）（当時逗子町）が切図上に





富士塚出土かわらけ

のおもかげは全くない

発掘調査と経過

発掘に至る経過 逗子開成中学校（現在の開成学園）の隣接地にはまだ畑地が多かった。昭和9年、運動場拡張のため、隣接の畑地（地主小野幸一）を買収したが、買収地内に將軍塚とよばれる前方後円墳があるというので学校長から県へ調査方を申し出た。当時県社寺兵事課がその業務を担当（係山田寅元属）していた。既に神奈川県史跡名勝天然記念物調査委員会ができており（昭和6年発足）、調査担当者として石野英・赤星直忠の両調査委員が依頼された。調査は昭和9年10月7日と決定し、人夫若干名のほか、学校側から小笠原教頭・岩崎航介の両先生と生徒20名が参加することになった。しかるに7日は雨天のため、神官のおはらいをただけで中止となり、14日に改めて発掘が実施された。

発掘経過 発掘は14日午前8時から開始した。発掘の直接指導は赤星調査委員があたり、石野調査委員が助言者となった。当日発掘に立ちあったものは中山毎吉・吉岡正雄・磯貝正の三調査委員、県属山田寅元、学校側から小笠原教頭・岩崎航介両先生のほかに鎌倉の亀田輝時。写真撮影は逗子小学校の嶋

示された所在地であり、開成中学校校地の北側に接する買収地の中、最北部に位置していた。当時この地は海岸の中程より少し北よりにあたり、汀線より200 mほど東北よりの砂丘上にあたっていた。このあたり一帯は海岸線に並行して低い砂丘がつらなり、標高3 m内外のところであった。明治初年の逗子町絵図でみるとこのあたり一帯は海辺の草原であり、砂丘上は一帯の畑地であった。その後、住宅があちこちに建ちだしたという。畑地の中央が次第に高くなっており、その最高地を「ふじづか」とよんで一種の神聖地とされ、毎年1月15日の左義長は必ずその頂上でおこなわれたという。ところが近年（昭和9年の時点で）左義長の風もすたれ、塚の周は次第に切りとられて畑となったという。かくて塚は偶然ながらいかにも前方後円墳であるかのような形になり、付近に小円墳形の高所があったものを陪冢と考えたためか、近年これを古墳群と称し、將軍塚の名さえできて、墳頂にて足をふめば地下に空洞があるかのような音がするというものもでた。又以前からこの付近の地下からは人骨がときどき掘りだされたと伝えている（註）。

現状 富士塚のあったところは現在逗子開成学園校地の北端にあたり、野球練習場の隅に削り残されたわずかに高い砂丘の名残があり、まばらな草地となっている。往年の富士塚

原馨先生が担当した。

塚は南に後円部があり、北に短い前方部がある形となり、全長20m、後円径12m、高さ3m。前方後円墳とすれば古い形を示していた。除上及び土運びは中学生が交替でやることになり、開始前に発掘上の注意が与えられた。即ち、本塚は現形状からは古墳ともみられるが全体の地形と塚の旧呼び名からすれば砂丘上に営まれた後世の供養塚とも考えられるから、何れの場合をも考慮して発掘することになると告げられた。

発掘は古墳発掘の一般的方法として後円部と思われる部分の中心部に長さ9m（北西～南東）幅3mの溝状が掘られることになったが供養塚の場合を考慮して上から少しずつ削り取る方法がとられた。塚は砂を多く混ざる黒褐色土から形成されているものと思われた。中心部において頂上より35cm下に赤褐色素焼小皿破片3、この下方約15cmに同じ破片2を検出した。ここにおいて一層注意をはらって掘り下げ中、破片出土地点より1mほど南にあたり、頂より70cm下に須恵器の小破片1個（表にたたき文、裏に青海波文のある甕断片）、東方約2mの地点にて頂より60cm下に常滑焼断片1が検出された。更にこれらの下を最大の注意のもとに除土中、さきに赤褐色素焼破片の出た直下にあたり、頂より約100cm下に3個の完形の赤褐色素焼小皿が三角形の各頂点にある如き位置にて発見され、破片1を伴った。中1個は伏せられていた。又これら3個の小皿の南東約3mの位置に同じ深さに同じような小皿1個を発見しその付近に破片4を検出した。ここにおいて3個の小皿を発見した部分を中心に、発掘中の溝に直角方向に同じく幅3m長さ5mの溝を掘りひろげたところ、最初に3小皿を発見したところより北東2m余のところと同じような4個の小皿と破片1が同じ深さにおいて発見されたので、この十字形溝を中心に掘りひろげ、頂上を中心に5m平方にひろげ、尚部分的に更に切りひろげたが以上のほかには何も検出できなかった。即ちこれらのことから、頂上より約1m下、塚のほぼ中心部分約3m平方にわたって同じような赤褐色素焼小皿が何らかの意味ありげに置かれていたことが明らかになった。

これら小皿が配列されていた平面下は約10cmにして帯黄色砂層となり、この層の厚さ225cmに及び、その下部には泥岩塊が多くみられ、その下は粘土層になっていた。これら砂層以下は無遺物であった。前方部とみられた部分に幅1m、長さ3mの溝を掘ったが、同じく黒褐色砂土層であり、全く遺物の検出なく、深さ約50cmにして、帯黄色砂層に変わることを知った。

塚の南裾部分から人骨1体が伸展埋没の形で発見されたが、これは黒褐色砂土層下の帯黄色砂層中にあり、その下方からは塚から検出されたものに似た赤褐色素焼小皿断欠が発見された。

作業終了午後5時。

ま と め

帯黄色砂よりなる砂丘上に黒褐色砂土層を覆うたものの高所に赤褐色素焼皿を配して何らかの行事をおこない、盛土して低い塚を築いたものと判断された。恐らく小字名として伝えられた「富士塚」はこの塚を指すものとして誤りないであろう。即ち海の彼方に霊峰富士をのぞむことのできるこの地に富士塚を築いたものであろう。

赤褐色素焼小皿は最大のものが高さ4cm、口径10cm、最小のものが高さ2.5cm、口径7.8cmであり、口径8cm内外のものが多い。何れも厚手（8ミリ～10ミリ）であり、平底。底から器側への立上りに稜をもち、器側は彎曲せず、そのまま外開きとなる。これらの小皿は鎌倉に多いやぐらに一般にみられる「かわらけ」とよばれる仏器の小皿であり、室町期に属する。

出土土製小皿の示す年代から考えて本塚は室町期における富士信仰のあらわれとして霊峰富士のみえる海岸砂丘上に営なまれた「富士塚」であるとしてよかろう。尚、盛土中にあった須恵器甕断片と常滑焼壺断片は付近の土中に混在したものが盛土に際し積みあげられたものとして誤ではあるまい。

帯黄砂層中からでた人骨は最近塚中心より南東14m余の井戸中から発見されたという人骨とともに直接塚と関係のないものようである。以前にも塚の南方及び西方が宅地としてひらかれたとき、土中から人骨が発見されたといい、その他付近からも時々人骨が発見された由を伝えている。古戦場であろうとの伝はこれら人骨の出土によつての推察とおもわれる。

（註）

○ 逗子町誌 （荒井友三郎著 昭和2年刊）

1. 藤塚と称す。人骨を蔵すること無慮数百人、丘上にて強く足踏むに空虚の如き音を發す。此の付近にて家を建つべく地を掘るにおびただしく人骨出づ。

1. 藤塚の古戦場なり

○ 米津氏の伝承は次の如くである。

富士塚は里見の遠孫と三浦一族住吉城主との間に、雨乞のため大山に参詣する人を妨害して戦った戦国時代の戦跡である。

○ 発掘見物に來た人達の話

塚の西方からも、南方からも人骨がでたことがある。

住 吉 城 跡

逗子と鎌倉との境を北から南に連る丘陵の南端、字飯島の山上に住古城跡と伝え、又同所正覚寺背後にある住吉神社境内を城跡と称し、或はその東隣の「げんじがやと」（秀吉氏別邸）を城跡と伝えている。史上に著名な城跡であるにもかかわらず、その所在は漠然としたものであった。然るに調査の結果、住吉城は光明寺背後から小坪へ越えた所謂「小坪坂」に臨んだ要害であり、その範囲は光明寺背後丘陵の南端「扇山」を主峯とする丘陵全体にわたるもので、東南端は小坪寺背後にまでつらなるものであることが明らかになった。

地形と現状

光明寺背後の丘陵は北から南にのびて海岸に達するものであるが、その先端は海沿いに東南に折れ曲って小坪部落にまで達している。その折れ曲り部が最も高く、これを扇山とよび、扇山の西山腹は絶壁となり、南山腹は中段に少しの緩斜地を持ち、ここが幾段かに削平されて正覚寺及びその周辺の民家所在地となっているが、海に臨む部分は絶壁状になっている。

江戸時代にこの絶壁中段を切り開いて路を通じ、小坪に達している。扇山の東南側は尾根がのびて小坪部落にまで達し、その南山腹に狭い平場があり、もとはこれを通して小坪に達したと伝えるが今は宅地となっている。この尾根の東南端に近い部分では南側山腹が幾段かに削平されて海前寺及び民家がある。尾根の東南側部分は尾根近い部分に削平部がつづき、又尾根が削平されたり、堀切られたりしている。

飯島と小坪をむすぶ交通には、今では光明寺南側から扇山の下を通ずるトンネル道が開かれ、バスも通ずる主道路となっているが、もとは光明寺背後の谷をのぼり、扇山の北側を越えて尾根の東側の谷に下る小坪峠路が用いられ、古老はこれを旧道とよんでいる。又正覚寺背後から尾根中腹を貫通するトンネル道も数本あり、この多くは古くからのものと伝えている。扇山を主峯とし、北は小坪峠路に、東は小坪部落にまで達するこの丘陵一帯が住古城跡である。近年逗子海岸から大崎山下を貫通し、小坪寺北方から「ぼんばたけ」を掘り割って扇山の下を貫通して鎌倉海岸に通ずる自動車専用の海岸道路が作られたため、城跡の遺構がひどく破壊された。

城の沿革

文献上から求められる城の沿革は次の通りである。

上杉氏の家老長尾六郎為景が逆心を起したとき、北条早雲はこれと話し合い、相模へ出張し、永正7年、住吉の占要害を取立てて城郭にした（註1）。その後三浦道寸がこれを攻めて陥し（註2）、弟道香に守らせ（註3）、自分の中郡岡崎城に居たが、永正9年、北条早雲が急に兵を起してこれを攻めたので、遂に陥り、岡崎城の搦手からのがれて、住吉城に籠った（註4）が昼夜をわかつた攻撃に、この城もおとされ、遂に三崎の新井城へ退くに至った。その後廢城になったものらしく、史上から姿を消し

た。

遺構にみられる城の防衛施設

文献では永正7（1510）年古要害を取立てたことになっているから、それ以前に城郭があったようにとれる。それを道寸が奪ったが、永正9年に早雲のために奪いかえされたことになる。それ以後のことは文献に全く発見されない。永正7年以前の古要害についても全く記録は発見できないのである。

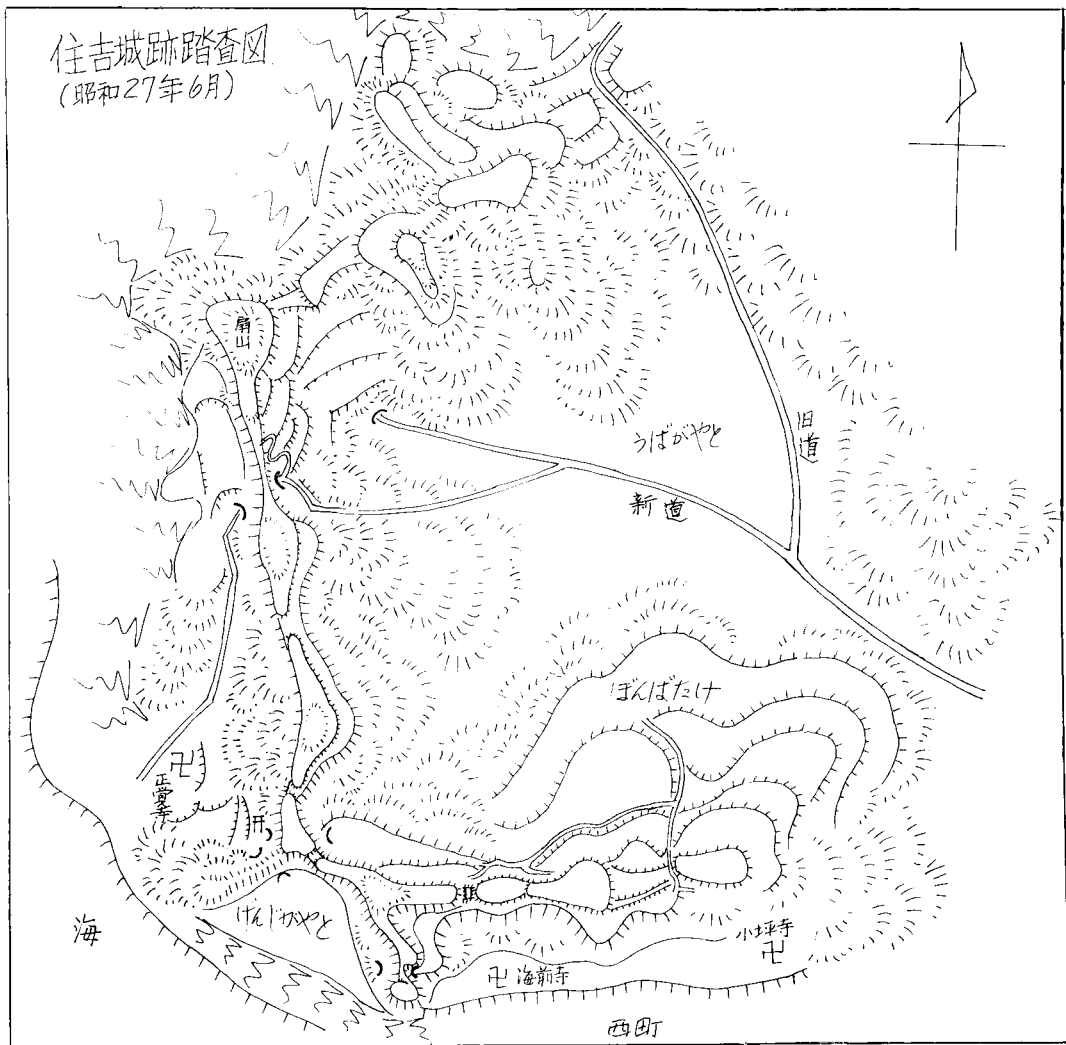
平安末に和田義茂と畠山重忠とが由比が浜合戦をしたとき（註5）、三浦義澄らが小坪坂の上に馬をとどめてさしまねいたという源平盛衰記の記事以外に記されたものはなく、このときも城であるとは記されていないから、古要害はそれ以後ということになる。鎌倉末期に三浦時継のことがときどき記録（註6）にでるから、もし住吉山を城郭にしたとしたらこのときではないだろうか。鎌倉期の山城は互に連絡のない平場が幾段にも山腹に作られて所謂城山の形式がとられ、鎌倉末期にこれが一層複雑化し、峯又峯に平場が作られ、これが連続し、各所に尾根が堀切られるといった形になる。室町期になるとずっと低いところの下って、広い平場や複雑な堀や土塁が作られ、人工が多く加えられるのである。このような城郭の一般概念から住吉城を検討してみよう。

当時の道路がどこを通ったかが先ず検討されねばならぬ問題である。

吾妻鏡や源平盛衰記は由比ヶ浜から小坪坂をのぼって山頂一望の場所に馬を止めたように記しているから、その路は海岸から急な坂をのぼって崖の上にてたと思われる。降って江戸時代の道は新編相模国風土記稿によると、海岸の切通路になっている。これは現在小坪と飯島とを結ぶ崖中段を通る切開いた路であり、小坪海前寺下と飯島正覚寺下とに庚申塔群のあるのによっても、これが江戸時代からの道であると知られる。そうするとともに急な坂を越えた路がいつころからか海岸切通路に移ったことになり、急な坂路である山越路こそ古道でなければならないのである。今飯島からトンネルを経て小坪に通ずるバス道路の外に、正覚寺背後の峯中腹を貫くトンネル、住吉社背後を貫くトンネル、住吉社境内から秀吉邸へぬけるトンネル、秀吉邸から峯中腹を貫いて東側へぬけるトンネルと四つのトンネルがあり、これらは江戸時代に使われていたものだという。このトンネルは少なくとも海岸切通路以前の通路であったと思われるが、急坂を山越した路の次に作られたものであったはずである。この急坂山越路と思われるものは、光明寺背後の谷から山を越して小坪の「うばがやと」にて、現在のバス道路の北側を地藏堂付近にでるもので、この路以外に山越道はない。古老もこの路を昔からの路と言っている。従ってこの山越路こそ源平盛衰記の小坪坂路であり、城郭が構えられたとすれば、この路を押えるための城郭でなければならない。

この路を押える目的でこの付近に要害地を選ぶとすれば、これに接する住吉社背後（正覚寺背後と言っても同じ）の丘陵一帯が選ばねばならない。然しちょっとみれば住吉社背後丘陵は狭長な尾根の連続で平場はその東南部において求められるばかりである。北条五代記には明らかに「鎌倉の近所住吉」と言っている。

住吉城の最初は不明だが若し三浦時継が最初に築城したものとしても、鎌倉及びこの路を正面にした



住吉城跡踏査図

はずである。早雲が取立てた永正7年にはどの方面を防衛する目的だったか不明だが、山越路に面し、又三浦に面した部分にも防衛線を作ったろうと思う。後に三浦道寸がこの城を奪ってからは、鎌倉方面の敵に対して防衛線の重点が向けられ、平場や切岸は多くこの方面に付加されたはずである。

このような観点から住吉社背後の丘陵をみると、西北―東南につづく狭い尾根は後世の人工が加わったかも知れぬが尾根の西北端が最も広く且つ最高所で、これを扇山とよび、8 m 平方の平場になる。これを中心とし、北及び南東に延々 500 m にわたって尾根が削平された部分がみられるばかりでなく、住吉社背後にあたる尾根の北東側は高さ 2 m にわたって切岸とされ、その部分には幅 3 m ばかりの曲輪状平場が尾根の北東側に存し、曲輪状のつぎる南東端で尾根が堀切られている。さらに南方、海前寺背後あたりでも尾根が堀切られ、その北側に同様な切岸と曲輪状がみとめられ、その西端は前述住吉社背後

堀切の南東山腹で、住吉社背後尾根北東側の曲輪状の南東端下方に達して終わっている。海前寺背後尾根の堀切の南側にも幅2～3mの曲輪状平地がめぐり、尾根の南側が切岸状になっており、尾根の南にでた支尾根の中程に達し、ここから尾根を堀ぬいて向うにでている。これら曲輪状平場の縁辺は切岸状に急斜面になっており、ここをのぼってくることは困難である。海前寺背後尾根は更に延び、これ以东ではやや広い削平部となり、その北端に数段からなる広場が次第に山腹を下っている。この中最も広い平場は「ぼんぼたけ」とよばれ、南北80m、東西100mにわたるものである。扇山にたてば北西は海岸まで直立60mの絶壁をなし、東側は高さ8m余の崖となって、東側の谷のどんずまりの尾根を見下す。この尾根は東北方につづき、山越路のある尾根は二つの瘤を経て山越部に達する。瘤の頂は削平されており、南西側の瘤の北側には幅3m、長さ10mの平場がある。山越部に面する尾根は現在高さ5mばかり及び2mばかりの二段の切岸になっている。しかしこの2mばかりの切岸は、近年付近の山頂が宅地化されたとき、山越部（峠）が埋められて現状の如くなったもので、もとは更に6～7m深いものであったという（南側山腹にある牛尾氏墓地をみあげて通ったと古老がいう）から、この切岸は10mばかりあったことになる。即ち、山越部は高い切岸の下を通っていたものであり、しかも切岸の上は削平されており、この削平部の西は再び高い切岸であった。その形は鎌倉期の山城の平場を思わせるものである。もし早雲以前の城郭が残るとすればこの部分に名残を思わせるようである。

最高部である扇山から南東にのびる丘陵の南西側をみると尾根につづく斜面は極めて急峻そのものであり、東側にみられるような曲輪状平場は全くみられない。正覚寺のある谷間においてのみ、その中腹以下に数段の平場がみられ、ここに正覚寺、住吉社及び民家をみる。（現在は更に民家の西方が切開かれて住宅地になった。もとはこれはなかった。）

かくの如き丘陵の状況からみて、これら尾根のつづきが城郭あととみられぬことはなく、住吉社東方の「げんじがやと」に城主邸館をおき、更に東方「ぼんぼたけ」一帯の広場に家臣の邸を営み、万一の場合は背後の尾根によって防戦することができるように計画されたもので、海前寺背後の堀切部付近尾根の南北両面の曲輪状平場がそれぞれ行きどまりとなり、尾根には直角に近い切岸があって、登ることができなくなっているなどが、これを物語る如くであり、ここを破られたら、尾根北西端最高所で最後の決戦となるのである。堀切が尾根の高い瘤の南側にあるのも防戦上の用意と考えられなくはない。

この丘陵を城郭だとすれば以上の如く説明がつき、これは山越路にも面し、又三浦方面を正面とした城ということになる。しからばこれを永正7年に早雲が取立てた城郭のあとと考えてよいであろうか。更に正覚寺、住吉社及び民家所在地の曲輪状地形も城郭の一部と考えられなくはないが、この谷はふくろ谷で背後丘陵への登路は住吉社わきから山腹に通ずるものがあるばかりで、その他には路がない。尾根の下をくりぬいたトンネル三本がこの谷から背後に通じているが住吉社背後のものは40数年前秀吉邸（当時幣原邸）への通りぬけが許されなくなったので新しく作られたもので、古いのは2本であり、この路があれば城郭としての用をしないではないが、これが伝えるように後世民用路として作られたものとしたら、この谷の曲輪が鎌倉方面に対しての使命に乏しいことになる。当時城に抜穴を作る（註7）ことが行なわれていたようであるから、これが城郭用の通路として作られたものとすれば、これは鎌倉

方面を正面とする必要のあった道寸の城として再興されたときでなくてはならないであろう。住吉社境内から秀吉邸へぬけ、更にその東の尾根をぬけて海前寺裏山尾根の南側の平場のどんづまりに通じているものと、民家の後方の尾根をくりぬいて背後の谷の中腹にぬけているものとの二つがもとからのものようである。これらはこの谷を城郭の一部として用いるためには極めて有効なものである。特に住吉社前には土塁が残っており、これが古くからあったものだということから、一層城郭の一部らしくなる。そういう見方からすると以上のべた住吉社背後一帯の丘陵が住吉城跡でなくてはならないことになる。ここが城跡であるとの伝えは古くからあったものらしく寛政9（1797）年の正覚寺過去帳にも記載がある（註8）。

ここで重要視しなければならないのは住吉社境内から南方尾根中腹をぬけて達する秀吉氏別邸（もと幣原氏別邸）所在地である。西南に開く半円状の谷で、前面は海を見下す絶壁となり、約40mの幅があり、三方は尾根でとりまかれ、その内面山腹は急崖になっている。谷奥から前面絶壁際まで約70m。上下二段になる。この谷を「げんじがやと」とよび二箇の大井戸もある。これを城あとと伝える説もある。これをとりまく尾根の外側は急峻な山腹又は切岸となっており、北側が最も高く、住吉社背後尾根から海前寺背後尾根につづく尾根の一部になっているが、この部分は住吉社背後尾根の堀切と、海前寺背後尾根の堀切とでたち切られており、更にこの尾根も西に近い部分で大きく堀切られている。このようにみえてくると、この部分だけが全く他から断絶した地域になっている。住吉城跡全体の遺構からみて、恐らく「げんじがやと」とよばれるこの部分が城主の邸館地でなくてはならぬであろう。「ぼんばたけ」の広い平地部分は家人の居館地であろう。今「げんじがやと」への出入口が背後尾根下を通るトンネルになっているがこれは秀吉氏が作ったものと言っているから、当然城跡に無関係のものである。（註9）

正覚寺無縁墓地に室町期の五輪塔や宝篋印塔が多数集められているが、これらは付近から集められたものといわれ、光明寺背後の谷からも多数発見されたことがあり、又海前寺下の庚申塔群の中にも若干の五輪塔断石がみられる。これらを直接住吉城合戦の供養塔と見ないまでも、城跡伝承地をめぐる時代の近似する供養塔が散在することは、古戦場としての城郭あとを考えさせるに有効である。

要するに住吉城は、新井城や三崎城にくらべて規模の小さいせいか、天然の要害のみをたのみとしたせいか、所謂城郭としての人工部分が目立たないから、現状から充分これを証拠だてることが困難であるが、尾根に残る堀切や曲輪状平場は古くからあったものだというから、これを城郭の遺構と考えてよさそうである。即ち光明寺背後の山越部から住吉社背後を経て小坪寺背後にわたる丘陵全部が住吉城跡と考えられるものである。

戦 歴

三浦道寸が岡崎城から逃れて住吉城に籠った時の戦が文献に残る唯一のものだが、北条早雲の軍に攻められて幾日も支えられずにおちている。詳細は全く不明。逗子市延命寺縁起中にこの戦に城を守っていた者を道寸の弟道香と記し、城を逃れた主従が延命寺で戦死したと伝え、今、寺にその墓碑と伝える

ものがある。

(註)

1 小田原記、北条九代記、鎌倉九代後記等にこのことは記されている。

2 北条五代記「……其の後三浦介道寸はかまぐらの近所すみよしに在城す！又、吉田東伍氏の地名辞書は「永正9年三浦道寸入道攻めて住吉城を取りしが……」としている。

3 返子市延命寺伝 一小坪城主三浦道香は道寸の弟にして早雲のために攻めたてられ、遂に城を退き、新井城に引き揚ぐるに際し、刀折れ矢尽くるまで戦い、遂に本寺境内にて重傷を負える主従七騎自刃す。

4 北条九代記

5 源平盛衰記

6 北条九代記

7 鎌倉公方九代記「古河城退治……詰の城に引籠り、木戸を下したりければ先に手こりして続いても引懸らず、互に見合ひてためらふ程に、予て詰の城より後の山へ抜穴をこしらへ、一人も残らず落失せたり。」

8 寛政九年七月正覚寺過去帳「中興御開山本山十八世真蓮社快啓上人天文十年三月十四日起立、初号悟真寺後号正覚寺、然両上杉之折小田原城主氏重、責三浦道寸依去破却悟真寺於此所構出張離防戦、終打負、荒次郎住吉城於自害、故歴代祖不知、寺宝記録等忘失。」

9 住吉城跡については鎌倉市史考古篇（吉川弘文館刊）に記したが、旧幣原邸内は見ることができないので記述しなかった。今回秀吉氏の厚意で邸内を見ることができたので追記するとともに、方向等について若干訂正を加えた。

小 坪 臨 時 台 場

外国船渡来と江戸防衛

鎖国政策をとっていた江戸時代には外国船の入港は長崎だけに限られていたが、年とともに出入外国船が多くなったので、寛永18（1641）年福岡城主黒田忠之の江戸参勤をやめ、外国船に備えさせたが、翌19年には佐賀藩主鍋島氏に命じて黒田氏と隔年交替で長崎の警備をさせることにした。非常時対策として長崎奉行の権限拡大と台場築造が行なわれた。その後北方においては安永7（1778）年以後度々露国船の蝦夷地来航があったので幕府当局は国防の必要を痛感し、寛政5（1793）年老中松平定信自ら江戸湾周辺を踏査し、海防策をたてた。然るに定信隠退のため、海防計画は中止せられた。

定信隠退後間もなく再び蝦夷地への露船来航があったので、幕府は蝦夷地警備のため出兵するとともに江戸湾防備を痛感し、松平定信を幕府顧問として防備に力をつくすことになった。文化7（1810）年定信の計画に従って江戸湾口相州浦賀付近と対岸房総海岸に大筒台場築造が命ぜられた。

外国船来航は年毎に数を増し、文化14年以後英船の浦賀その他への来航が度々あったがその後しばらく外国船来航がたえ、海防論も静まったが天保8（1837）年米船モリソン号の浦賀来航により再び海防論が盛になり、天保14年江戸湾防備強化が実施されたが、これと前後して外国船渡来が激化した。海防論の激化は弘化嘉永年代にわたる江戸湾防備にはくしゃをかけ、安政元（1854）年のペリー来航以後は江戸湾防備がほぼ完成した。このような世情の中にあって江戸湾防備と並行して相模湾岸防備も実施せられていた。この相模湾岸防備の一環中に小坪の台場も含まれているのである。（註）

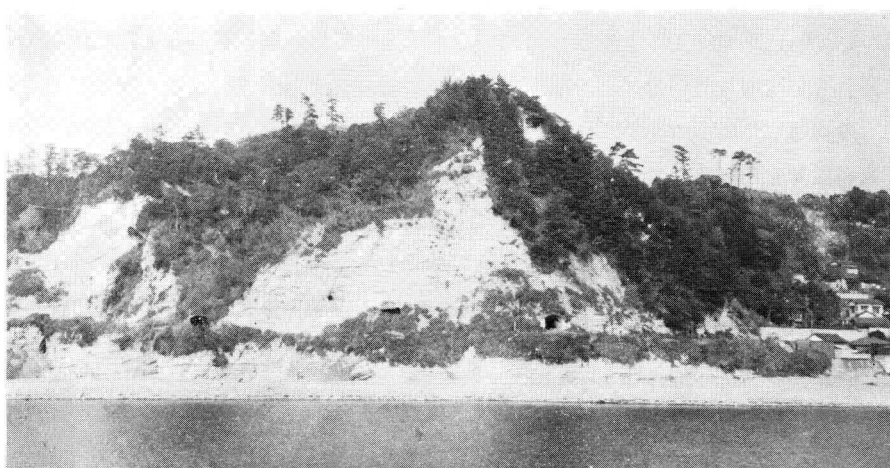
小坪台場

小坪に台場が準備されたことは当時の記録である嘉永3（1850）年石川土佐守以下7名（内に井上左太夫、田付主計の砲術家2名を含む）が海岸防備状況を視察したときの意見書に記されているのである。しかし小坪台場の詳細については全く不明である。

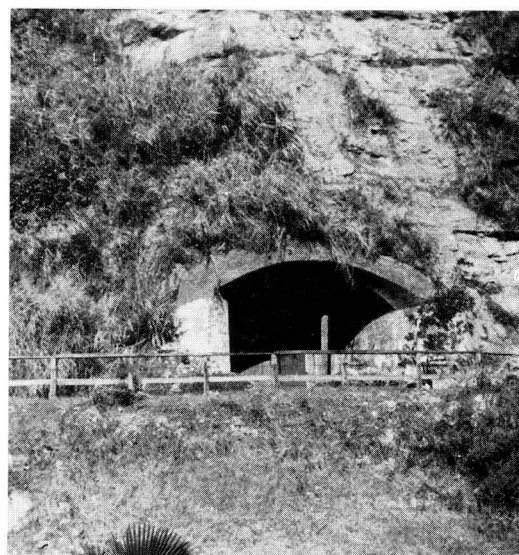
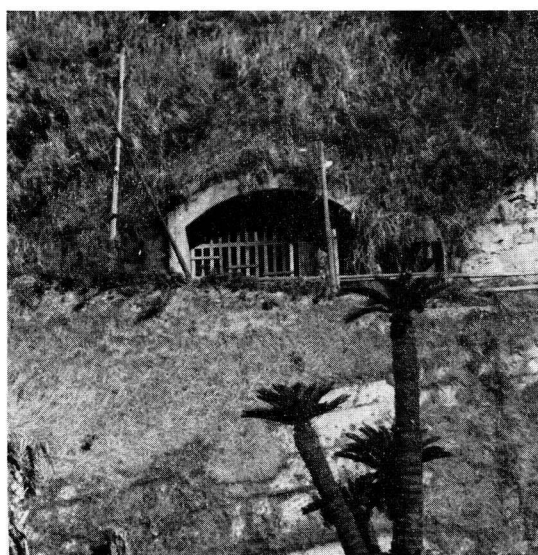
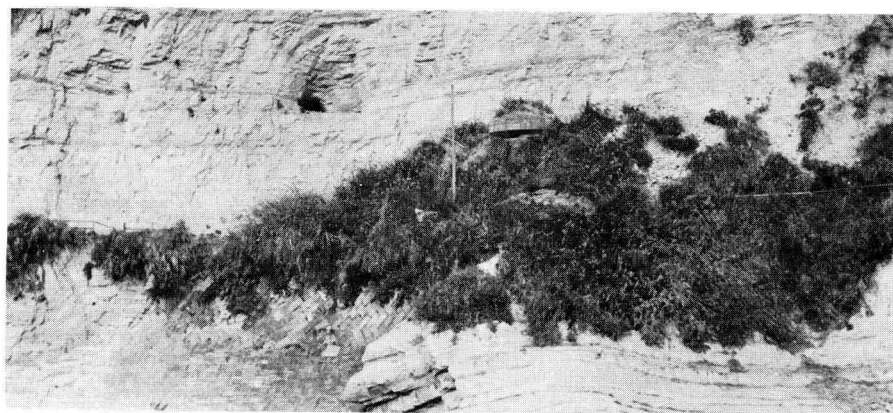
相模湾岸には長井（横須賀市）の荒崎台場から腰越（鎌倉市）の八王子山遠見番所までの間には防備施設の常備がない。したがって有時の場合には秋谷海岸（横須賀市）と小坪海岸（逗子市）に臨時台場を設置することになっていた。石川土佐守意見書には陣屋（上宮田陣屋）から遠いので、万一の場合の用意として大筒三挺が村方あずけになっていると記している。彦根藩が三浦半島防備に当たっていたときのことである。同じ嘉永3年の「近海御備向見分」には上宮田陣屋の備砲中に小坪村へあずけてあるものとして、300日筒2挺と200日筒1挺が記されているから臨時台場用としての3門の砲の内容は明らかである。小坪のどこに臨時台場があったか全く不明であるが、海面からやや高い位置に、海に面して芝をはった砲丸除上手が4基ならんでおり、その間に砲が置かれるように準備されていたものと考えていいのであるまいか。第2次大戦末期米軍上陸作戦に備えて、小坪と鎌倉との間（飯島鼻）の山腹に洞窟砲台が作られた。防備上の常識は当時も今もそう変わるものではないから、恐らくこのあたりが予定さ

れていたとしてよかろう。今、洞窟砲台あとのある上方に秀吉氏の別荘がある。南に開いた平地の東北西三方が丘にかこまれ、平地は上下2段になっている。正覚寺境内からと海前寺上方の畑地から通ずるトンネル路が古道として残っている。この邸内なら、海に面した崖上に芝をうえた砲丸除土手を準備しておくとしても最も適した場所である。あるいは、海前寺下から正覚寺前へ通ずる山腹路のうち、海前寺下あたりも適当に考えられる。この場合、芝付の砲丸除土手も作られておらず、万一の場合の予定地だけがきめられていたと考えることもできる。とにかく小坪台場は砲だけが準備され、村あずけになっていたことが明らかなだけで、その位置も準備された設備も今では不明である。

（註） 赤星直忠「三浦半島城郭史・上巻」昭和29年度横須賀市教育委員会発行による。



小坪洞窟砲台跡（上全景、中観測所、下砲台跡）



小 坪 洞 窟 砲 台

現 状

小坪と飯島との間に海に臨んで突出した絶壁がある。この絶壁中腹に小坪と飯島をつなぐ崖道が通じている。この道を前にした絶壁の突出部分に厚いコンクリートで巻かれた半円形の大洞穴が、少しはなれて2個ならんでいる。これが小坪洞窟砲台のあとである。両洞窟の中間やや高い位置に厚いコンクリートで包まれた銃眼状の残存物がある。観測所である。右（東）洞窟から東へ50mほどへだだったところと、左（西）洞窟から西へ50mほどへだてたところに素堀の同じような矩形断面の小洞窟がある。洞窟砲台への入口であろう。狙撃陣地を兼ねているものであろうか。現在洞窟砲台あとは蔽重に閉じられている。子供らの遊び場になっていたが崩壊岩塊で怪我人がでたため、閉じられたものという。洞窟砲台への入口とみられる部分は素堀であるため内部が崩壊しており、危険で内部の通路状況を調査することができない。近年前面海岸に広い埋立地ができたため、全く地形状況が変わってしまった。

大戦終末期の防禦態勢

第2次大戦終末期における関東地区防禦態勢の概要を述べねば小坪海岸洞窟砲台の説明ができない（註1）

昭和20年7月の関東方面における地上作戦は第12方面軍（方面軍司令官大将田戸静老、参謀長少将高島辰彦）の指揮下にある第51軍（軍司令官中将野田謙吾）が鹿島灘正面の、第52軍（軍司令官中将重田徳松）が九十九里浜正面の、第53軍（軍司令官中将赤柴八重蔵）が相模湾正面の防禦をそれぞれ担任し、又東京湾正面においては東京湾兵团（兵团長中将大場四平）が南部房総半島の、横須賀鎮守府部隊（司令長官中将戸塚道太郎）が三浦半島の防禦を担当し、その外郭の伊豆諸島の大島・新島・八丈島にはそれぞれ一兵团が防禦につき、帝都は東京防衛軍がその防禦に当たった。別に中部関東地区一帯に配される予定であった第36軍（軍司令官中将上村利道）は九十九里浜方面を決戦正面と概定して、これに即応する如く利根川下流地区に推進した。

この時期における地上兵力は伊豆諸島を合わせて一般師団18箇（内一箇は新潟に配置せられ、外に皇居守衛の近衛第1師団があった）、戦車師団2箇、独立混成師団7箇（内1箇は沼津方面）、独立戦車旅団3箇、独立歩兵連隊2箇（内1箇は下田方面）、高射師団1箇、軍直諸部隊、警備旅団3箇、宇都宮・東京・長野の各師管区部隊のほか、横須賀海軍特別連合陸戦隊18箇大隊からなっていた。

昭和20年4月以降の戦備強化について一応述べておきたい。4月初には敵の本土上陸近しと考えられるに至ったので、第12方面軍は沿岸防備強化のため、兵团の大部分を沿岸要域に推進せしめて、戦備を強化することになった。東京湾兵团長は4月5日各地区隊に対し、詳細な防禦陣地構築命令を下すとともに、各地区隊の戦闘任務及び戦闘地域を指示した。これに従って各隊は指示された高地その他要地に歩兵の抵抗陣地を構築した。三浦地区においては岩堂山に歩兵約1大隊（1中隊欠）、城が島・菊名・

56、5高地及び剣崎に各歩兵約1中隊の抵抗拠点を構築した。4月29日方面軍は東京湾口閉塞の強化を図るため、兵団及び横鎮に対し、防禦に対する詳細な命令が下されたが、その後も戦局の進展に伴い、配備の変更、火砲配置の変更が相次いで行なわれた。火砲は各地にほとんど1門ずつ分散せられる状態となった。7月1日第3次沿岸築城に関する要綱が指示せられ、敵戦力をつとめて水際地帯において積極的に破砕することを目的とした陣地の再検討がおこなわれ、築城戦備の強化がおこなわれた。ついに敵艦砲の本土射撃が日立に対して行なわれ、本土決戦まじかしと思わしめるに至った。7月15日、兵団は戦闘準備を完了せよとの作戦命令を下し、各隊の戦闘任務と作戦地域を指示した。7月23日衣笠火薬庫の火薬約100トン进行総金谷付近に転送の命令を下した。作戦命令は次々とだされ、各隊は戦闘準備を着々と整えた(註2)。

一方三浦半島においては鎮守府司令長官の指揮下にあつて防禦態勢が着々と進捗していた。敵の上陸を水際に撃砕する目的をもって各所に洞窟砲台が構築せられ、長射程砲が備えられた。敵の上陸が予想せられる地点には洞窟陣地や厚いコンクリートで覆われたトーチカが築造せられた。油壺湾・小網代湾・松輪湾には特攻舟艇の根拠地が置かれ、沿岸に作られた洞窟中には特攻舟艇が多数待期した。海上特攻作戦は横鎮司令長官が担任した。

第1総軍司令官は東京湾正面の作戦を統一するため、房総三浦半島の陸上作戦を横鎮司令長官統轄の下に東京湾兵団長に統一指揮せしめる意見を提言したが、横鎮司令長官の同意を得られなかったので、結局独立混成第114旅団を三浦半島に増強し、鎮守府司令長官の指揮下に入らしめた。

相模湾東半部の沿岸築城

従来の東京湾要塞は帝都及び横須賀軍港防禦の目的をもって、敵艦の浦賀水道強行突破に備えたものであったが、火砲の進歩と航空機の発達により、その意義を失なったので、長射程砲を湾口に備え、防禦航空基地を備えてその意義を再確認しようとしたが、大東亜戦争後半期の敗戦に次ぐ敗戦の連続はついに本土決戦のやむなきにいたらしめた。四周に海をめぐらす我国はこれに備えて敵上陸防禦のための築城を必要とするに至った。これが沿岸築城である。要地に長射程砲及び機銃狙撃陣地を配し、その中間の砂浜地帯には厚いコンクリートに覆われたトーチカを配し、背後の丘陵には幾重にも抵抗陣地を構築した。房総半島南部・三浦半島においてもこのような築城がおこなわれた。

相模湾沿岸東半部の防禦陣地は次の如くである。

浜諸磯 三浦市浜諸磯の突端、南向の丘腹に15センチカノン砲(註3)2門の洞窟砲台。首線南西。別に西北側岩崖に8センチカノン砲1門の洞窟砲台。首線西北。

三戸 三浦市三戸海岸北方岩崖と南方岩崖とに狙撃用洞窟陣地。

黒崎 三浦市三戸海岸北方の黒崎突端に15センチカノン砲3門の洞窟砲台。

長浜 三浦市長浜海岸の中央の岩崖と北方岩崖(横須賀市)に狙撃用洞窟陣地。

新宿 横須賀市長井新宿台地に15センチカノン砲4門砲台。首線西北。天神島沖をむき、佐島及び長者が崎洞窟砲台と十字砲火を形成する。

佐島 横須賀市天神島対岸の岩崖に15センチカノン砲3門の洞窟砲台。首線西及び西南。

長者が崎 葉山町長者が崎基部。15センチカノン砲2門の洞窟砲台。首線1門は南、三浦半島西岸に近づく敵艦船に対するもの。1門は西、鎌倉・逗子海岸に近づくものに対する防禦。江の島及び小坪洞窟砲台と十字砲火を形成する。

小坪 逗子市飯島鼻の岩崖。15センチカノン砲2門の洞窟砲台。首線南。鎌倉及び逗子海岸に向って近接する敵艦船を撃滅する任務をもつもの。長者が崎洞窟砲台・江の島東崖洞窟砲台とともに十字砲火をあびせることができるようになっていた。

稲村が崎 鎌倉市。8センチカノン砲1門の砲台。

七里が浜 鎌倉市。田辺海岸に8センチカノン砲1門砲台。

江の島 藤沢市。江の島東崖に15センチカノン4門の洞窟砲台があり、長者が崎砲台と十字砲火を形成する。西崖に15センチカノン4門砲台があり、湘南海岸に近接する敵に対する防禦。

片瀬丘陵 藤沢市。野砲2門。

鎌倉山付近 鎌倉市。28センチ榴弾砲(註3)2門。片瀬丘陵陣地とともに湘南海岸防禦陣地。

玉縄城跡 鎌倉市城廻。24センチ榴弾砲2門。

千疊敷山 大磯町、28センチ榴弾砲2門。

尚これら付近丘陵一帯に歩兵の抵抗陣地があった。

(註)

1 大東亜戦争全史(服部卓四郎著)第4巻第9編「本土決戦」による。この部分の説明はほとんど原文のまま借用した。小坪洞窟砲台説明に関する東京湾要塞部分は同書を参考して書かれた「三浦半島城郭史下巻(東京湾要塞史)、赤星直忠、昭和30年度横須賀市教育委員会発行」による。

2 東京湾要塞歴史及び同付録命令綴に拠った。しかしこの資料は7月30日で途絶えている。

3 カノン砲は砲身が長くしたがって砲弾の初速が大きいから敵艦側を射撃するに適する。遠距離を射撃するのもこの砲である。15センチカノン砲は砲口の直径が15センチあるカノン砲である。砲は1門2門と数える。榴弾砲はカノン砲にくらべて砲身が短かく、口径の12~13倍から20倍くらいのもの。したがって砲弾の初速がカノン砲ほど大きくないから、上向に発射し、敵艦の甲板を打ちぬく。28センチ榴弾砲は口径が28センチあるもの。

小 坪 高 角 砲 台 跡

逗子市新宿4丁目。披露山公園内に猿が島がある。これは小坪高角砲台のすりばち形の砲座跡を利用したものである。

三浦半島には戦時中、米軍の来襲機から横須賀軍港を守るため、空に対する城郭として軍港の四周に無数の防空陣地が構築されていたが、小坪高角砲台はその中の一つである。第二次大戦後半期に至って大部分が築造されたもので、B29来襲に際しては防空砲台として極めて偉力ある存在であった。その分布は南に木更津（千葉県）・武山・荒崎・衣笠・畠山・葉山・小原台・大津、東に猿島・第二海堡、西に鷹取山・二子山・小坪、北に野島・朝比奈峠付近、中央に砲術学校内・田浦に構築せられ、その構造は敵機来襲が予想される方向を首線（正面）とし、これに直角に火線（砲の配列）を配し、その背後に指揮所が位置した。最優秀なものは二聯装10cm高角砲であったが、多くは二聯装12.7cm高角砲が備えられた。中には12cm直接照準の四門砲台もあった（註）。

小坪高角砲台は二聯装12.7cm高角砲2基が備えられており、指揮所において敵機を捕捉するディレクターとよばれる高射装置が備えられていたという。

（註） 赤星直忠「東京湾要塞史（三浦半島城郭史下巻）」昭和30年度、横須賀市教育委員会発行による。

狙 撃 陣 地

逗子海岸に上陸する敵に対する狙撃陣地は各所にあったと考えられているが終戦後25年以上を経過した今日、多くは崩れ埋もれて所在を確認できるものは少ない。新宿海岸西端、稲荷社のある山端（新宿4丁目。馬淵建設用地背後）にはコンクリートでかためた狙撃陣地と、歩兵戦闘用の胸牆（弾丸よけの土堤）が半ば埋もれて残る。

国鉄横須賀線の東北側、久木谷入口の西北端（久木5丁目11）の岩崖に南をむく銃眼が残り、久木谷入口の南東端（久木1丁目2-1）岩崖に西をむく銃眼が残り、これにつづく逗子駅裏西北側山腹一帯（山の根1丁目2及び1丁目3）にも狙撃陣地があるらしいが今はほとんどみられない。山腹西端裾に近年工場が作られ、山裾が切りとられた際、山腹陣地をつなぐ連絡通路が露出した。

久木谷奥から池子にわたる丘陵部分のもと軍用地であり、地下工場用の地下壕が縦横に作られているが、これらも防禦陣地としての計画内にあったものとしなければならない。尚、小坪洞窟砲台のある飯島鼻の西岸にも抵抗陣地とみられる地下壕が残っている。

高 養 寺 五 輪 塔

所 在

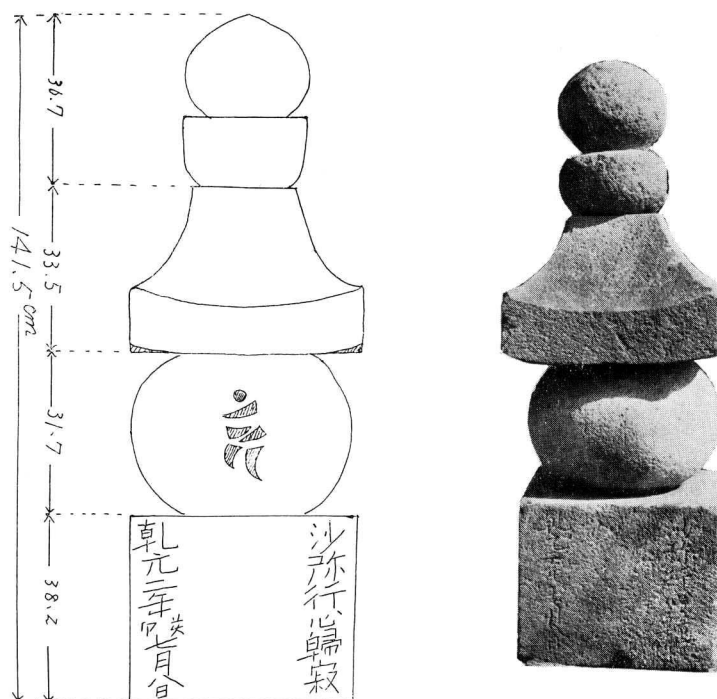
逗子市新宿5丁目 高養寺境内。

戦前調査のときには葉山町堀内の慶増院境内にあり、塚形の上に立ち、二階明神と称され（註1）、傍に板碑数基が立っていた。昭和28年慶増院は逗子新宿海岸にあった白滝山不動堂（註2）の位置に移り、高養寺と称した。この時五輪塔も移された。

解 説

五輪塔は本堂の左にある。移転後作られた台石上に立つ。総高 141.5cm。地輪に『沙弥行心歸寂』乾元二年^{癸未}七月八日』と刻まれ、水輪の一方に梵字バンを刻む。水輪は球の上下を等分に切った形（最大径が中央にある）、鎌倉期。火輪は軒の厚さが中央にくらべ、端が少し厚くなる。鎌倉末というより南北朝期。空輪の形をみると最大径がやや上にあり、南北朝期のものと判断される。

更に石質をみるとすべて安山岩であるが、地輪と水輪は白っぽい同質のものだが、火輪は黒色、空風輪は赤味黒色であり、本来同質の石で作られるのが普通の五輪塔が3種の異った色の石で作られていることはおかしい。



高 養 寺 五 輪 塔

南関東における鎌倉後期ごろの五輪塔の地輪・水輪・火輪幅は大体同じくらいであるのが普通である。本塔は地輪（44.7cm）・水輪（44.5cm）・火輪（47.8cm）となり、地輪水輪は大体同じだが火輪は大きすぎる。この不揃は石質の不揃と、水輪と火輪の形態からみる年代差との違いからくることであろう。火輪上幅（露盤）と空風輪の径とは大体同じであるのが普通である。しかるに火輪上幅（19.9cm）に対し、空風輪径（26cm）が大きすぎる。年代的には似たものだが、石質が異なる。これらによって火輪と空風輪が別ものとする。

即ち地輪・水輪は本来のものだが火輪と空風輪は別ものであり、大体の大きさを揃えて組立てたものとするがどうか。細かな観察をぬきにすれば一般のものには乾元二年銘の鎌倉後期塔として通用するであろう。重要文化財指定。

（註）

1 新編相模国風土記稿所載

2 浪切不動とよんでいたが、徳富蘆花の小説「不如歸」の舞台になったことから、俗に浪子不動といわれた。

小坪小学校前バス道の塔

バス道の山裾に庚申塔群がある中に五輪塔水輪1がある。安山岩製。中形の大きさ（径25cmくらい）。形は最大径部分が中央よりやや上にあることから、室町初期乃至南北朝末のものと推察される。側面に「華」の刻字をもつから北華宗関係のものとしてよい。

仏乗院境内の塔

小坪4丁目仏乗院の境内には五輪塔や宝篋印塔の断石が入口左方にも、本堂西側の墓地にもみられる。何れも室町中期のものである。裏山旧墓地が崩れたとき背後の山腹から出たものを移したという。

正覚寺境内の塔

正覚寺本堂右前の無縁墓碑群中に五輪塔や宝篋印塔がまじっている。でたらめに積んであるが、宝町初期から中期にかけてのものが多く、鎌倉末らしいものもみえる。又本堂右に2m平方ばかりのところ、五輪塔や宝篋印塔の断石をしきつめてある。室町中期のものとみられる。

新宿 2 丁 目 の 塔

新宿 2 丁目 9-24 高橋敏氏わき路傍に石地藏などの立つ中に五輪塔断石がある。空風輪 1、火輪 2、水輪 1。室町中期のもの。

（付記）五輪塔とならんでひどく風化した凝灰岩の碑（高約 1 m 厚約 35 cm）がある。「涅槃会や耳に



正覚寺石塔婆群

そ……（以下不明）」と刻まれているので句碑であるとわかる。この碑は大正末年から知っていた。早くよんでおけばもう少しわかったろうとくやむ。

東谷戸、うちでの塔

小坪湘南サナトリウム北方の谷。うちでの谷は内部中央に小尾根が北から半島形に突出する。この小半島で作られた西側の小谷のすそ、小半島突端と向い合ったところに安山岩

製五輪塔や宝篋印塔の断石（五輪塔地輪 6・火輪 6・水輪 1・宝篋印塔笠 3・相輪 1）が積んであったが、これらは室町中期の形態のものであった。地輪の一つに在銘のものがある。地輪幅 21 cm、高さ 17.5 cm。中央に梵字アを刻み、右に「道阿禅門^{遵修}」左に「至徳四十月^{十五}」と刻む。現在この地は宅造されたので存否不詳。

小 坪 出 土 板 碑

イ 仏乗院板碑（図左）

所在 逗子市小坪4丁目579 仏乗院内

裏山中腹の墓地が崩れたとき五輪塔断石とともに出土したものという。裏山の旧墓地には五輪塔や宝篋印塔（室町中期ころと思われる）の断石が残っており、付近には赤褐色素焼小皿（かわらけ）断欠が散在しているから、この山腹が中世の墓地であったとしてよからう。

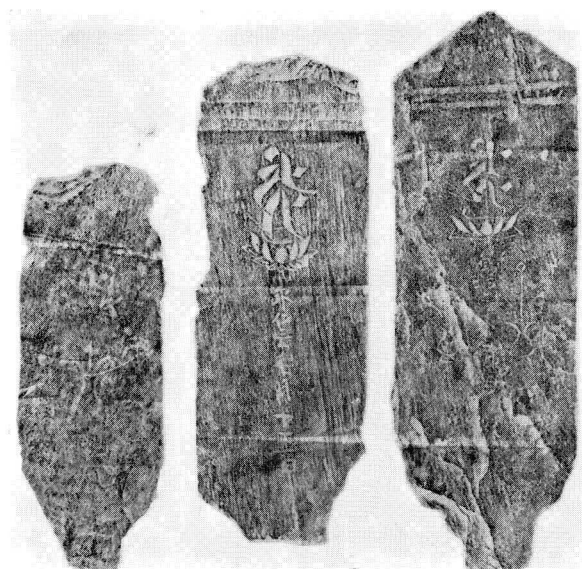
解説 板碑は緑泥片岩製。風化がひどく、刻字はほとんどよめない。総高49cm、幅16cm。上部が欠けている。上に蓮座上に安住する阿弥陀如来をあらわす梵字キリクがあり、その下に華瓶1個がある。梵字や華瓶の形から室町中期のものと判断される。

ロ 小坪寺板碑（図右）

所在 逗子市小坪5丁目9、小坪寺内

もと墓地にあったものを今本堂内に保存するという。

解説 緑泥片岩製。破損はないが風化のため文字や華瓶がやや不明瞭になっている。総高66cm、幅20cm。上部に2本の線を刻み、その下に蓮座上に安住する阿弥陀如来をあらわす梵字キリクが刻まれる。文字も蓮座もよい。蓮座下に「貞治二年□月日」と刻み、左右に華瓶を刻む。キリクの文字も蓮座も華瓶も鎌倉末の形を示すから、刻まれた貞治二年のものとしてよい。



小 坪 出 土 板 碑

ハ 高崎邸内板碑（図中）

所在 逗子市小坪4丁目16-3 高崎実氏邸内裏庭の池畔にたつ。庭隅の崖付近で発見したものという。崖には鎌倉期の墳墓窟であるやぐらが1個あり、もと内部に五輪塔20基ほどあったのを裏山へ移したという。板碑もこのやぐらにあったものとしてよからう。

解説 緑泥片岩製。頂部と側部が少し欠けている。高さ56cm、上幅18cm、下幅19cm。上部に2本の太線を入れ、その下に蓮座上に安住する阿弥陀如来をあらわす梵字キリクを刻む。その下中央に「永仁三年七月十五日」と刻むが「十五日」は後刻である。本板碑は小形だが上部の2太線の刻方、蓮座、梵字は鎌倉後期の板碑として誤ないものである。「永仁三年七月」の文字はまずいが板碑の年代と合致する紀年であるから、当初のものとしてよからう。左右に華瓶が刻まれていたと思うが風化のため痕跡もなくなっている。

仏乗院の石灯籠

小坪4丁目、仏乗院本堂西側墓地。開山法誉上人墓という無縫塔がある。本来の台石と塔身との間に蓮座を刻んだ6角の台石が入っている。安山岩製。この6角柱形の側面（高8cm、幅17cm）をもつ石は上半がわずかのふくらみもちながら次第に上り、上面が円形（径17.5cm）の受座となる。総高13.3cm。6角形の対角線34cm。上半部には単弁の蓮弁12枚が沈刻されている。

この6角形の石は明らかに開山墓とは無関係のものであり、今まで見た例からすれば、これは石灯籠の台石である。境内にはこの灯籠の他の部分は発見できないが、かつては境内のどこかに立っていた灯籠であったはずである。蓮弁の形態からすれば室町末である。

小 坪 寺 半 鐘

小坪寺は明治12年焼亡後、報身院と香蔵寺とを合併し小坪寺となったもの。建物も本尊も半鐘も鎌倉の光明寺からもらったものという。光明寺は本山である。

半鐘は龍頭高12cm、笠形4.4cm、鐘身40.6cm、総高57cm、撞座径5.2、撞座高11cm、駒爪高3.5cm、同厚3.7cm、内面が少し上っている。口径33cm、乳は4段4列、乳の間だけで縦帯上にはない。龍頭は江戸期の型にはまった一般形であるが拙作ではない。銚口は龍頭に平行して笠形の上に1個ある。笠形頂面は平らであり、側線は鐘身上端にわずかの曲線を描いて下っている。鐘身上端の肩あげ状の張出しはない。乳はやや長い柄の上に重ね餅状をのせる形である。撞座の子房は八花形をなし、蓮子は中心1個、周8個からなり、梅鉢形に表現されている。子房をめぐる多数の雄蕊が配されているが撞きへって明らかでない。花卉は複弁8枚の間に下側の弁がのぞいているものであるが、ひどくつき合っている。上帯なく、下帯には唐草連続文があるが銚崩れがひどく、はっきりしない。銘文は次の如くである。

(第一区)

大施主内藤暁山藤原時倫

寛政九年「己」六月寄附

相州鎌倉天照山光明寺

弥陀堂七十世超蓮社倫誉念「海上人代

(第2区)

前来破損ニ付

文政三辰年正月鑄改之

八十三世「空」菅上人代

(第2撞座上縦帯)

江戸 西村和泉守作

撞座文様の不明瞭や下帯文様の銚崩れのひどさはこの銘文から考えて旧鐘を型にして鑄直したものとみてよからう。龍頭の出来のよいのは寛政9年作の龍頭の出来のよいためであろう。第1区は旧銘であるが大施主内藤暁山は今も光明寺に内藤家(日向延岡城主)墓地として多数残る内藤氏一族であろう。この半鐘は鑄改めたものであるが、旧銘は内藤家研究資料の一つとしてあげることができる。

小坪地藏堂の石像

小坪地藏堂（小坪6丁目6-10）は駐在所隣にある。地藏は安山岩製・立像。延命地藏。江戸期。2級の台座上に蓮座をおき、その上に立つ。高179cm、蓮座高32.5cm。上の台座は幅100cm、奥行98.5cm、高さ不詳（床が張ってあるので測れない）。小坪の海から上った地藏と伝え、毎月23日念仏が行なわれる。8月23日念仏が最もにぎやかな由。台石は床板にかくれて刻字が充分よめない。

「乃施主」一切聖「」三界万靈「」□□□□「」光啓西□「」□敬□「」

地藏堂には伏鉦が1個ある。表径16cm、裏径19.3cm、3脚付。鉦高5.8cm、足とも高8.2cm。次の刻銘がある。

文化十癸酉年七月「小坪村地藏堂什物」西村和泉守作

江戸の鳴物師として著名な西村和泉作である。

地藏堂裏崖下に小形地藏坐像がある。高さ25cmほど。安山岩製。蓮座上に座するもの。背面に舟形光背がある。一石造。無銘。光背の形と蓮座の形から室町末かとみられる。

堂裏には弥勒坐像・地藏坐像がある。弥勒坐像は高さ9cm、幅43cm、奥行33cmの矩形台座上に座し、片膝をたて頬ずえついた形。安山岩製。高53cm。台座四方に次の刻銘がある。（観音像か？）

（前） 妙迎「」妙円「」妙観「」嘉玄「」妙認「」慈林「」入心「」妙閣「」妙秀「」授故「」泰度「」正清「」妙清「」妙心

（左） 妙□「」妙□「」妙□「」妙□「」妙□「」無界万「」□□有「」無助縁「」

（裏） 寛文「」元辛_丑天「」十月廿「」二日「」淨林「」

（右） 建立「」之施主「」已上同「」行十九「」人増迎「」仏果「」菩提也「」

地藏坐像は蓮座上に座し丈高の舟形光背を負った半肉彫の一石造。総高72cm、幅35cm、蓮座高13cm、像高31cm。光背の先が前に大きく傾くことと像より光背がひどく高いことから江戸前半期のものと考え。裏に「妙円信女」と倒さに刻んである理由がわからない。

小 坪 の 祭

本稿は今回逗子市文化財調査報告（小坪・新宿）を記すにあたり、昭和24年4月から5月にかけて採集され、記録された赤星ノートによって「小坪の祭」を整理し、新仮名使いに改めたものである。

前書き

「近頃、景気はどうだ。」「小坪の祭だ。——タランコタランコよ」という会話を若いころ、横須賀市法塔の通り（今、公郷町3丁目あたり）で聞いたことがある。面白いとえだと思ったので、いつかしらべてみたいと考えていた。昭和24年4月から5月にかけて小坪の祭をしらべにかかったが採集はよういでなかった。伊勢町の進藤鐘次さん（床屋）から祭についての話をいろいろきかせてもらった。「小坪ばやし」についても進藤さんのお骨折りで、同所の高橋正義さんと、南町の一柳伝七さんにたのんで書いてもらうことができたものである。

小坪の祭と小坪ばやし

小坪の祭は有名である。その神社は牛頭天王社だがむかしは鷺浦神社といったという。天王社は字谷戸にある。祭は毎年7月15日だが33年目には森戸の世はかり明神のもとに渡御される例になっていて、このときは9月に祭をする。

小坪は海にのぞんで東から南町・伊勢町・中里町・西町の4町にわかれている。南町と伊勢町の北側にそびえるのがお伊勢山。伊勢町と中里町の間に川があり、その上流を「谷戸」という。祭の順序や行事は別に採集せねばならないがここには採集できた「天王うた」と「小坪ばやし」を記すことにする。

天王うた

御輿は谷戸の天王社に安置されている。祭のとき、受けとりにゆくのであるが、この御輿かつぎは4町内が順年にやっているから、4年に一度番がくる。このときは他の3町内の者はしずかにみているだけである。

妨害でもしたらめされるという。御輿の四方を小若衆・若衆・壮年・老年の4組にわかれて警護する。天王うたはこの4組が順ぐりにうたうのである。

一人が音頭とりになって「めでためでたの若松様よ」とうたうと、他の者が「ハイヨーイ」と合の手を入れる。次いで「枝も栄えて葉もしげる」とうたうとかついでいる者が「ヤンデ、ヤンデ」とかけ声をかける。うたがすんでしまった最後のときには「オモシロヤーエ」と結ぶことになっているそうである。

天王うたとして独特な文句はわすれられてしまったらしく、一般にうたわれるものに異ならないそうである。（本来の天王うたは採集が困難である。それは文句が卑俗であるという理由で、うたってくれないからである。誰か土地の老人にたのんで特に書いてもらうよりほかに採集する方法がない。）

「谷戸を今朝でて、四町内を廻る。四町の氏子は出ておがめ。」

これは谷戸を出発するときうたわれるものだという。次のは知られすぎた文句であるが、天王うた

としてうたわれるものだそうである。

「富士の白雪は朝日でとける。むすめ島田はねてとける。」

「姉もさしなよ妹もさしな。同じ蛇の日のからかさ。」

小坪ばやし

今の「小坪ばやし」には2系統あってひとつは伊勢町から中里町に伝えられたもの。他のひとつは鎌倉大町から南町へ伝えられ、更に西町へ伝えられたものだという。だから伊勢町中里町の系統と、南町西町の系統とは別系統である。「はやし」を文字であらわすのは頗る困難なもので、これを知っている本人でないと書けないものだという。さいわい、進藤さんの骨折りで高橋正義さんの手で伊勢町のものが、一柳伝七さんの手で南町のものが書きとめられたのをもらいうけたから次に記しておく。

イ 高橋正義さんによる記録

小坪伊勢町祭ばやし（太鼓の部）

そもそもこのはやしは古より伝わるものにして、その起源は現在にては町内の古老といえども知らず。したがって次に記す中の呼称もすべてあて字なるやも知れず。筆記方法は経験者が初歩者に教える口伝的のものなれば、そのへん御承知の上御読行をこう。

種 別

1 四丁目 （シチョウメ）

2 鎌倉 （カマクラ）

3 笙殿 （ショウデン）

4 打込 （ウチコミ）

5 にんば

様 式

小太鼓 2

大太鼓 1

笛 1

鉦 1

すべて小太鼓を中心に行なう。大太鼓はそれに合いの手を入れる。笛、鉦は伴奏となる。

1 四丁目

小太鼓 「トスコ、トンコ、トンコ」これを連続する。

大太鼓 「スコドコスコトン。スコドコスコトン。トンガトントン。トントン、トントン。トンガトントン。トントン。スコドコドスコ。トンスコトン。トロスコトントン。トンガ。トントン。トントン。トントン。トンガトントン。トントンガトン。」繰返し。

合間をみて笛師が笛によって「タマ」を入れる合図をする。これに応じ小太鼓が「タマ」を入れる。

呼称「トヒショトヒショ」「スコドコドン」コリヤ「スコドコドン」コリヤ「トロスコドン」コリヤ

「トロスコトロスコ、トンスコトン」コリヤ「トロスコトントン。トロスコトントン」

これで普通の「トスコトンコトンコ」にもどる。大太鼓はこのときは小太鼓の「コリヤ」「コリヤ」といれてあるところに合の手のばちを入れる。

「終末」 笛による合図できりかわる。

呼称「チャヒヤラヒヤラ」

小太鼓「トロンガトン。トロンガトン。トントン。トントン。トロンガトン。ピシ、シーシ」で終了。

大太鼓は小太鼓最後6節のうち4節まで合の手を入れつつ、いっしょに打って終わる。

2 鎌倉

小太鼓「スケレン、テレスコ。テントドンドン、テン、テン、ドコドンドン。テントヒトツ」でもとにもどる（連続）。

大太鼓は小太鼓が最初の「スケレンテレ」までまって「スコ」から合わせて、「ドンド。トコロッ。ドンド。イケドンドド。トコロツドドイケドンドド。イケイケドンドド。トコロツドンドド」でもとにもどる。これは「タマ」はなしで以上を繰返えす。

終末 笛により合図で切かわり、呼称「トヒヤラ。ヒヤット」で

小太鼓「トヒヤラ。ヒヤット。トヒヤ、ヒー。ヒヤリドド。ヒードド。オヒヤリコヒヤ。ピシシーシ」で完。

大太鼓終末7節の内、4節は合の手を入れ3節目より、「ヒードド。オヒヤリコヒヤピシシーヒ」は合わせて打上げる。ただしこの場合は終末の切かえは小太鼓が「テントヒトツ」と打ったときに笛が入る。

3 笙殿

小太鼓「テンスッテン。スケレン。テンドドンド。テンヒトツ。テン二ツ。テン三ツ。テン四ツ。テンテンスッテン」（かけごえ「ツーコエツーコエ」）「テテン テン」（かけごえ「ソラエー コ ツー コエ」）「テテンテン」で「テンヒトツ」にもどり以後繰返えし。

大太鼓は小太鼓が第3節の「テケレン。テントドン」まできた時より「トドンドド。トコロツツドド。イケドンドド。トコロツツドド。イケドンドド。イケイケドンドド。トコロツツドツ。ドンドド」で前にもどり以後繰返えし。これも「タマ」はなし。

終末 笛により切かわり。呼称「ピーシーン」で

小太鼓「テンテン。スケレン。テンテン。スケレンテン。テケテンテン」（ソリヤ）「テテンガ。スケレンテン。テンテレスケテンテン。テーケテ。テンテンテン。テテスクスクヒヤリ。オヒヤリコ。ヒヤリヒヤリ。オヒヤリコヒヤヒヤラドンド。ヒヤラドンド。ヒヤラドンド。ヒヤ。チーチャオヒヤラ。トヒヤヒヤ。オヒヤ。ピッ。」（コリヤ）「スケレンテンテンテン。テケテン。テケテン。テレドド。テレドド。テンテレスケテンテン。トンガトー。トスコトン。トンスコトン。テテッポ。ヒヤリヒヤリ。ヒウヒウヒヤリヒヤ。ヒヤリヒヤ。テンテレスクス。テレスクス。トコトン。テンテレスクスッテ

ン。スケレンテンテンテン。ピシシーシ」で完。

大太鼓は小太鼓の最後から2節の「スケレンテンテン」までは合の手で「テンテンテン」からいっしょに「ピーシーシ」で打上げ。この場合は切かえは小太鼓の普通のところの「テンーツ、二ツ、一ツ、四ツ」までいったところで切かえる。

4 打 込

小太鼓のうち内側、つまり3人ならんでたたく真中のものがばちをふりあげて「オーエ」とかけ声をかける。

小太鼓「トコロントン。トコロン。トントンスコ。トントンスコ。トントンスットントロスコスットン」までかけ声をかけたものが一人で打つ。以後二人。

小太鼓「トコロントン。トントントン。トコロントンスットントン。トントコロントントコロントン。トコロントン。スットントントン。トントコロントンスットントロスクス。」を通常繰返えす。小太鼓前奏のうちは合の手を入れているが、小太鼓が普通のところにきたら

小太鼓「トコロントン。トントントン。トコロントンスットントン。トコロントン。トコロントン。トコロントントントントン。トントコロントン。トコロントン。トンガトートン」を繰返えす。合間をみて笛師が合図により切かえるが二通りある「タマ」を入れる。呼称「ヒヤラトロ」で

小太鼓「トロスクトントン。トロスクスクスク。トロスクスクスク。トロスクトントントロス。トロスク。トロスクトントン。トコロントン。スットントン。トコロントンスットン。テンテンドンド。テンテンドンド。一、二、三、四、五、六、七、トコロントンスットントン。トントコロントン。トコロントン。トコロントン。スットントントン。トントコロントン。スットントロスクス。」で普通のところに移る。呼称「ヒャーラヒャーラリー」で

小太鼓「スットン。トロスク。トロスク。トロスク。スットン。スットン。トロスクトロスクスットンスットン。スットントン。トントコロントン。トコロントン。トコロントン。スットントントン。トントコロントン。スットントロスクス」で普通のところに移る。

以上二通の「タマ」の間は大太鼓は合の手を入れている。

終末 呼称「チーヤヒャラヒャラ」で、小太鼓「トロンガトン。トロンガトン。トントン。トロンガトン。ピシシーシ」で打上。大太鼓「トロンガトンピシシーシ」はいっしょに打上。これは四丁目と同じ。

5 にんば（歌付）

四丁目と打込とにんばと三者一連に打上げる。

『一つとやー 一夜が明けたら にぎやかだー にぎやかだー おかざりたてたら にぎやかだー』

大太鼓、小太鼓ともに歌い合わせてたたく。歌のかわり目に笛が四丁目の笛が変わったら、ともに四丁目にかわる。又笛が打込の笛にかわっていったら、ともにかわってゆく。

歌い合わせてたたく→四丁目→打込

終末は打込の終末と同じ。

小坪伊勢町居住 高橋正義記す。

ロ 一柳伝七さんによる記録

小坪南町祭ばやし

このはやしは小太鼓を中心とする。小太鼓は笛に合わせてたたき、大太鼓は小太鼓に合わせてたたく。大太鼓と笛とすりかねは小太鼓のばんそうのようなもの。次の文句は師匠が教える便宜上の口伝的なものであるからその点を御承知の上お読み下さい。

種 類

- 1 鎌 倉
- 2 四丁目
- 3 ころばし
- 4 打 込
- 5 笙 殿

はやし様式

小太鼓二つ。大太鼓一つ。笛一つ。すりかね一つ

- 1 鎌 倉

小太鼓「テンテン」

大太鼓「トドコドンドン」

小太鼓「テン」

大太鼓「トドンドンドン」

小太鼓「テレンテン」

大太鼓「トドド」

小太鼓「テン」

大太鼓「トドドスコドンドン」

右を何回もくりかえす。笛の合図により次の四丁目にうつる。鎌倉より四丁目にうつるかわり目のはやし

小太鼓「トシャラトピットンシャア」

大太鼓「コリヤ」

小太鼓「トシャラトピットンシャアトウテテスケテン」

大太鼓「サノ」

小太鼓「テケテンテン」で次の四丁目にうってゆく。

- 2 四丁目

小太鼓「トスコトコトコ」。これを何回もくりかえす。大太鼓は小太鼓に合わせて小太鼓の一、二が片方ずつかわるがわるに入れる「タマ」と同じことをたたく。小太鼓の「タマ」は笛の合図により片方

ずつ入れる。

小太鼓の一「ストンガトン。トロンガトン」（こりゃ）「トロントントンストンガトン。トロスコトントロスコトン。トロスコトロスコトンスコトン」（こりゃえ）「トロン。トントン。トスコトコトコストンガトン」「トロコトコトコ」

小太鼓の二は一の「タマ」にはかまわずに「トスコトコトコ」をくりかえしている。このようにして一と二はかわるがわるに笛の合図によってときどき「タマ」を入れる。又笛の合図で次のころばしにうつる。

四丁目よりころばしにうつる変り目

「トロジャラジャラジャラ。トロジャラシャッテン」「トロジャラジャラジャラ。トロジャラシャッテン」「トロジャラシャッテン。トロジャラシャッテン。トロジャラジャラ。トロジャラシャッテン」これを三度くりかえし次にうつる。

「シャアラシャラーラ。シャアラジャラ」「シャアラシャラーットロイヨ」「トロイイトウロトロイヨ」「トロイイトロイイトロイヨ」二度くりかえす。

「シャアラシャラーラシャアラジャラ」「シャアラトウロトントントン」「トコロントンスットントン、トントコロントン、スットントントコロントンスットントン」「トントコロントン、トントントロスクス」で次のころばしにうつる。

3 ころばし

小太鼓「トロスクス、トロスクトンツクツ」これを何回もくりかえす。（この場合大太鼓は伴奏的のものですから除きます。）

笛の合図により「タマ」を入れる。この「タマ」は小太鼓二ついっしょに入れる。やはり大太鼓は伴奏的です。

笛の合図「シャアラジャラリ」

小太鼓「スットントンツクトンツクスットントン、トントンツクトンツク、スットントン、スットントン、トントコロントン、スットントン、トコロントンスットントントントントコロントントントントロスクス」

笛の合図「シャラ、シャアラ、ジャラーオ」

小太鼓「シャオロシャオロシャアラジャラ、シャアラトコトアアラジャラ、トロジャラジャラジャラチイシャアラシャトロジャラジャラジャラチイシャアラジャ、チイシャラジャラジャラララ、トコロントンスットンスットントン、トコロントンスットントン、テンテンドンドロドンドロ、ヒイ、フウ、ミイ、ヨウ、イツ、ムウ、トントントコロントン、スットントン、トントコロントンスットントン、トコロントンスットントン、トントコロントントントントロスクス」

4 打 込

これは、ころばしと同じですが前のように鎌倉、四丁目、ころばしと順にゆかず、「タマ」より直ちにころばしにはいる故に打込という。

小太鼓の「だけでたたく。「トロントントコロントンスットンスットンスットントン、トコロントロ
スクストロン」それから小太鼓二つ大太鼓もいっしょにたたく。「トコロントントントン、トコロ
トンスットントン、トコロントンスットンスットントン、トコロントンスットントン、トコロント
ンストントントントントントントントントントロスクス」「トロスクストロスクト
ンツクツ」となり、以下ころばしと同じ。

5 笙 殿

小太鼓「テンテン」

大太鼓「トドンドド」

小太鼓「テレンガテン」

大太鼓「トドド」

小太鼓「テンテン」

大太鼓「ドンドド」

小太鼓「テンーツテンニツテン三ツテン四ツ」

小太鼓「テンテン」

大太鼓「ドンドド」

小太鼓「テレンガテン」

大太鼓「トドド」

これをくりかえす。笛の合図により「タマ」になり終わる。

笛の合図「ピヒーヒ」

小太鼓「テンテンスケテンテンテン、スケテンテレスケテンテン、テンテンテンスケテンテン、テン
テレスケテンテンテケレンテンテンテンテン、トスコトコトコ、ステンガテン」「シャラリヨ、シャ
ラリヨ、シャラリコシャ、チイヤオシャリ、チイヤオシャリ、ビー」「スケテンテンテンテンドコドン、
トシャラ、チシャラ、トシャラチシャラ、シャラトロシャラリヤチリットロ、チリットロピーピシイシ
イシイチリットロ、テケテンドコドンテケテンドコドン、テケテンドコドン、シャラリコシャラリコ、
シャラリコヤ、トスコトコトコ、ステンガテンテンテンドコトン、チリット、シュウドドシュウウシュ
ウシュ、シャオシャ、チイシャイドドシャ、ヤドコド、シャオシャ、チーチリットロッピー、ピシイシ
イーシ、サノテケテンテン」

(付)

南町の一柳伝七さんの話によると、小坪にはアメヤオドリ、船唄、餅つき唄もあるという。アメヤオ
ドリは伊勢町の常盤音吉さんが伝えているに過ぎないという。祭の餘興などに鉦・太鼓に合わせてうた
い、数名で組んでおどるのであるが、これを伝えた老人の多くが死んでしまったので今ではそのおど
りを知るものは少ないという。船木やりは伝七さんから次の二つをきくことができた。

今船をあげるときうたう

○引けよわかいしゅう、切れるなかがす、ホライヨ、軽くあがれよ、お船玉、ホライヨ
○ともにや大黒、おもてにえびす、中に十二、お船玉

後 記

この記録をしたときから既に20余年たった。戦後の大きい変化で何によらず形を変えた今日、果してどのような形を残しているかは改めて調査し、記録してみなければわからない。誰か現在の小坪の祭を詳細に記録するものがいたら、その比較ができるだろう。そのような誰かはいないだろうか。

お わ り の こ と ば

本市の文化財保護対策が文化財保護委員の諸先生方の特段のご協力によりまして順調に進められておりますことに對し衷心より敬意と謝意を表する次第であります。

このたび報告書第4集を刊行することになりましたが、この内容は小坪、新宿地区の調査結果でありましてご多忙のところ調査執筆して下さいました本市文化財保護委員の貫達人、赤星直忠、三山進、関口欣也の先生方及び鎌倉国宝館の三浦勝男先生のご尽力に對しここに深く感謝を申し上げます。

なお現在までに市の重要文化財として16件を指定いたし、保護を図るとともに文化財の由来等を説明した解説板を設置し市民に文化財に對する啓蒙認識を図っています。今後とも市民の皆様の文化財に對する一層のご理解とご協力をお願いいたします。

社会教育課長 相 原 多 一 郎

昭和48年3月30日印刷

昭和48年3月31日発行

逗子市文化財調査報告書 第4集

小 坪・新 宿

編 集 者 逗子市教育委員会
発 行 者

横浜市金沢区六浦町4033番地

印 刷 所 村松印刷株式会社